といふ

普門藏人俊清居せし也越後國大井田彈正中條高山風間稱津大田瀧口を初めとして其勢都合二万餘騎にて新田義貞の加勢として越中へ打こへけるを普門藏人國の境へ出て支へんとせしかども俊清無勢なれば大半討たれて松倉の城へ引籠るよし太平記二十卷にあり中古日本治乱記云應安二年九月桃井播摩守宮方なるによつて先年越中の守護職を取放され此方彼方流浪しけるが義詮將軍薨去に時を得て一族並舊好の者を相語ひ直常か舍弟修理太夫直信其弟三郎直弘が息刑部少輔詮信直常が嫡子中務少輔直和一味同心して其勢七百餘人國民を追補す彼國の守護斯波義將此事を聞て申けるは我父足利尾張守高經入道道朝執權なりし威勢に募りて嫡子左兵衛佐氏頼を執事職に被補たるに道朝入道氏頼を惡んで執權の事を妨ぐ氏頼父を恨みて遁世し玉田庵主心勝と號しぬ依て義將家嘗を繼て九州の探題に被補陸奥守家長加賀國に居住す兄弟悉く國々の守護となると武恩の忝ふする所也然るに我守護の國の敵の足を留させんは一には忠なきに似たり二には勇なきに同じ三には大將の器にあらず早く馳向て誅すべしとて二千餘騎にて馳向ひ直常が屯を襲ひ討たり 中略 直常終に戰ひ負て松倉の城に引籠息直和猶素懐を遂けんとて越中長澤と云所へ出張して所々に放火したる所に義將二千餘騎にて馳向ひ散々攻戰ふ直和も爰を先途と戰ひけるか大勢に敵し難く直和終に討死し其餘黨皆沒落し越中平均したる由申ける將軍を初め筑紫へ發向の首途よしとて悦び給ひける義將越中の守護職に補せられ給ふは太平記三十九卷に見へたり天正九年二月信長公京都にて馬揃有へしとて諸國大名を召さる是に依て越前加賀能登越中の大名何茂上洛す此折を得て越後の上杉景勝の臣河田豐前守此松倉の城より伐て出で小井手の城を攻動かす此事京都へ聞へければ北國の諸侍何茂いとま賜て馳下る河田は佐々の後詰のため歸國と聞て小井手の城の圍をとき松倉の城へ引入ける成政も居城守山へ打入らる信長公佐々の早速成功を感し越中の守護職を佐々に賜ひけるよし北國太平記に有

椎名小四郎道三居城とも云又椎名駿河守とも有家傳假治の抄に義弘と云有畠山殿の小手丸の作人なりと越中國松倉住人義弘の銘を打ちありと云

小出古城　小井手也

平城にて南北三十二間東西三十間水橋より十六丁ありと云下條保内なり佐々喜藤治居せしとなり事は松倉の古城と參見すべし

小川温泉

ひら谷と云所あり此温泉小川村にある由此所へ飛ひしとて小川の湯と云此小川村の辰巳に佛が嶽といふ高山有雪の消る比大入道のたち姿に見ゆる故か僧が嶽とも云又温泉近の山に木葉の形のある石多くあり

館古城　下條の保内なり

館の古城跡は弓館村にて古土肥美作守居城也と云又南保の館とて南保彌五右衛門と云人の城なり

と云義經の時石黒宮崎南保の殿原とは此南保の事なりといふ今は一姫の墓と云有

天神山　古城　射水郡にも天神山と云有

加積郷小川山入なり甲陽軍鑑に景勝我身にかゝりたる大事と思ひ何さま一合戦と存つめ七日路はかりの所を後詰して天神山大岩寺野に陣取と有或云天神山の城は謙信の出城にて戦は天正八年の事なり

大岩寺野

名のみにて今は大半田畠村里となれり

吉祥寺野

昔吉祥寺伽藍にて有しゆへ野の名もかく云也今も其礎有此野に犬の城と云有此犬を大谷と名付くるなり犬の頭なりとて今も歳末年始の禮など、いひて諸方より犬多く來る事ありとぞまのあたり云ふに任せて爰に記す

かうかしら谷

浦山の高なり爰に大なる巖有此岩に人の足手の跡馬の足跡など彫付ること〳〵有所の人色々の傳説をいふあやしき事なり

愛本橋　長さ三十三間半廣二間　駒寄四間四間

寛永元年に初めて掛けしとなり三才圖繪に相本の橋大木を以て組出したる棧橋なり木曾の棧も是にしかずと書て又無非軒三千風といふ人の此橋の賦ありと云追て可考也此橋は四十八ヶ瀬といふ黒部川に掛たるなり越中は川多くして橋なし越中七不思議の一つなり正保二年二月　小松中納言樣江戸御發駕の節所々川々に橋を掛させらるゝ也新川郡の川をいはゞ

堺川、笹川、小川、舟川舟川小川一つとなりて赤川と云ふ　黒部川四十八ヶ瀬と云　布施川、片貝川布施片貝一つに落合　角川此川より西東を下新川と云　早月川名所の槻川が上市川を新川と云　上市川の末なり　大岩川、白岩川、杤津川前は大岩川白岩川杤津川常願寺川すへはは川と云一つになる常願寺川甲陽軍艦に出す新庄川荒川赤江川鼠川皆常願寺川の分れ也熊野川、薄波川、神通川熊野川薄波川土川井田川山田川皆神通川へ落る也

勝月晴日生地と魚津との間に汐干あり一里はかりも干るなり是をしる人稀也又蛤樓台を作る事此沖にせつ〳〵あゞと云

三日市

越中櫻井と鉢の木の謠にうとふは此三日市のよし昔東派德法寺あり辻源左衛門と云者初て親鸞に謁し法を聞て俗弟となる其子孫住僧となると云、三才圖繪

魚津古城

七國志に云天正十年五月信長公越後景勝を退治すべしと柴田以下北國の諸將に下知し給ふ依て柴田修理勝の佐久間玄番、佐々成政、前田公、德山小兵衛、神保安藝守、椎名孫六入道以下四万八千余騎を相隨へ瀧川左近將監二益、森勝藏長一と牒合て越中に發向し魚津の城を攻動かす是に依つて上杉景勝魚津の城後詰の爲め越後春日山を打立ちて越中天神山を陣せらる、所に信州海津の城主

森勝藏太田切より景勝の居城春日山へ乱入のよし聞へしかば上杉家天神山を引拂ひ春日山へ皈陣せらる柴田以下の諸將氣にのつて頓がて魚津の城を攻破り城主吉江織部河田豐前守を初め悉く討取て勇み掛る事限りなし然る所に同六月京都より飛脚到來して去二日本能寺にて信長公御父子日向守光秀のために御生害のよし告けれは柴田以下の諸將大に驚き我先にと魚津表を引取ける下略此後利長公の御手に入城生の城に入置給ふ靑山佐渡を此魚津の城へ移し給ふ其節城生村西勝寺二代目の住僧淨祐を佐渡入魂故同道にて魚津へ至り後一寺を建立す今の照願寺是なりと云魚津の町に久阿幸國とて町人家二軒あり大同年中より子孫相續今にあり此二軒の家には折々不思議なる事ども有よし

滑川

今枝内記を越し給ふ事三齡聞書に有之

水橋

館跡あり古水橋將監といふ人の館なりと云ふ枕草子にわたりは水はし註に越中とあり

舛方

加積郷なり佐々新左衛門後は竹田宮内と云人の居城なり西北は高山峙ち連り東南は切れ谷竪二十五間横二十間ありと魚津より一里十一町あり今も五月五日の早朝數千なかれの旗見ゆる事ありと云或云升形の城は岡崎四郎義守應永二年巳六月二日入城天正年中謙信方より責落す末子魚津に流浪なり後に島の内宮ヶ島村にて少高を持天正年間の西本郷村藤左衛門といふは是なり

佛生寺　古城

弓庄郷なり戸井美作守居せしとなり南北六十八間東西二十八間一說に土肥美濃守居城なりしとも有又細川曾十郎と云人の居せしとも云

堀江　古城

戸打左衛門尉居せし城也と或云土肥但馬守居城せしなり中地山の城河上中務と云堀江城南北三十間東西二十八間高さ五尺程あり城下川あり高月川なり高月より一里十丁ありと云

大村　古城

轡田豐後守居せしと云東西二十六間南北三十八間にて水橋より三十六丁長坂五ヶの内なり

東岩瀨　古城

廣田郷なり東西卅間南北九間岩瀨より一里卅丁あり三輪權平居せしとかや此權平は佐々成政の臣なり七國志ゑ三輪權平は堺を守らしむとあり或館跡なり藤澤彌次右衛門居せしとも云

早稻の香やわけ入見れば有磯海　はせを

新庄町　古城

此城主は轡田備後守井上肥後守兩人楯籠る越後景虎と大なる合戰あり新庄より富山までの間に尻たれ坂にひや橋など云あり其節合戰の街なりとひや川とて昔は大河なりしとなり今も少しありさ

て此城は元龜三年に落城するなり其跡今東西七十五間南北六十八間なり或云佐々のため落城なるべし舊記に據ところあるなり然れども佐々は天正年中越中へ來る元龜三年は天正元年なり此說も是か追て可考又ひや橋の道筋に石地藏あり此地藏を縛れば瘧疾落ると云此所淨出寺といふ伽藍あり經堂のありし處を今は經堂村と云是なり此石佛も淨出寺の地藏なりと云此淨出寺の本尊は富山淨誓寺の阿彌陀如來是也

清水村

享保十四巳酉年閏九月四日此時に一株の松あり大さ梁にすべし然るに三日の夜より此松に一丈はかりより火燃付て四日には枝毎に火移りて燒のぼるいかなる故といふ事をしらず此根元より虛なれば煙草火にても置きしにや其節見物の人多かりし此松の下は小松原佐左衛門と云人の墓なりと云又所々上人松といふあり是は准如大僧正江戸へ下向の時御興のたちて門下の拜禮を受て其御興のたちを門下追慕のあまり松を植ゑて後世の印とす是を上人松と云

町村の宮

景清の墓といふ平家の士惡七兵衛にてはあるべからず或云越後の景勝の類葉なりと傳へし

神宮寺　日養山　眞言宗

上掛尾村に有聖武帝日本に七ヶ寺神宮寺を建つその一寺なり

棚ヶ原村

人穴と云有此穴越後へ通りて先年白犬を越後より入けるに黑犬に變じて此里へ出けると云

下伏村

蛇骨あり累々とつらなりたる事半道斗白くして白石を並へたるが如し何れの時死したると云事しれず今以所々殘りてあり或云下伏村は婦負郡の內なり但昔は新川郡の內なりしや今下伏村の隣田地村と云所に今に蛇骨多し瘧疾を落すに如神

富山

往昔は藤井村と云普泉寺は古富山寺と書し藤居山と云藤井村といひし故此號ありしとなり

富山町長さ四十五町横町十二町四十間通り町名十八ありと云安永十巳年町の總丁數御改

一番町	三丁	二番町	二丁	中町	四丁	袋町	三丁	西町	二丁		
東四十物町	三丁	太田口町	三丁	室屋町	二丁	中野町	二丁	餌指町	三丁		
中野新町	四丁	石倉町	三丁	古鍛治町	四丁	古寺町	二丁	西南田町	三丁		
東南田町	三丁	海老町	三丁	南新町	五丁	立町	二丁	五番町	四丁		
仁右衛門町	三丁	西三番町	二丁	川端町	二丁	東三番町	二丁	今町	二丁		
鍛治町	二丁	荒町	三丁	材木町	二丁	木町	五丁	西堤町	二丁		
今木町	三丁	東堤町	二丁	川原町	二丁	新川原町	四丁	小島町	三丁		
先上り立町	三丁	向川原町	二丁	東田町	二丁	北新町	三丁	東中間町	四丁		

柳町三丁　稲荷町七丁　横町一丁　覺中町一丁　清水上町一丁
風呂屋町一丁　米屋町一丁　寺内町一丁　片原町一丁　北横町一丁
八人町一丁　中島町一丁　古川町一丁　西中間町一丁　後町一丁
下金屋町一丁　上金屋町一丁　黒木町一丁　宗將町一丁　山王町一丁
門前町一丁　木場川原町一丁　太夫町一丁　東散地町一丁　南新町散地一丁
南田町散地一丁　中野散地町一丁　砂町二丁

右南の御門より東の方

越前町二丁　旅籠町二丁　西四十物町一丁　千石町二丁　牟吹町四丁
御坊町七丁　土居原町五丁　長柄町十二丁　堀端町四丁　鉄砲町三丁
長清寺町一丁　七間町二丁

右南の御門より西の向寄

船頭町三丁　愛宕町五丁　今町二丁　船橋新町二丁　五福新町一丁

右舟橋向之分

總町名九十一

或云稲荷新町の端に城跡あり天正年長尾謙信の築く所なりと

府内神社寺院

天台宗寺町四　隆　稲荷町照　岸
眞言宗眞興　普泉　正念　宥照　來迎　長久
顯正院　不動院　祐眞院　高緣
禪宗光嚴　海岸　清源　全慶
同法燈派　遵華　興國　大平
淨土宗西養　守山極樂寺町來迎　大信　遵台　布市來迎
極樂
淨土眞宗四派　遵照　願稱　滿德　長源　金乘坊　大德
正龍　願海　淨誓　妙福　滿淨　長念
遍照　西岸　明榮　大雲　乘光　正源
持專
同東派　永福　永宗　遵照
專　專珠　極性　正覺　覺性　妙樂　極成
聞成　專福　慶念　明休　善久
法華宗一致派　大法　本顯　立像　妙國　妙傳　法華
全勝　本證　乘光　立正　長清　本長

同　勝劣派　本壽　正顯　長運　本揚　安立
時　宗　淨禪

寺々傳記繁多なれば略之

山王權現出王町四月朔日六月朔日祭　神主　平尾大和

富山座宮往昔は向新庄村に御鎮座と云神社啓蒙に云祭神七座大宮なり大巳貴命二宮櫛常立尊神皇產靈聖眞子正哉五勝尊客人伊弉冊尊十禪師瓊々杵尊三宮惶根尊右本宮七社なり所謂十四座加上七座稱廿一社

利次公御再興の節御棟札寫に日吉山王權現と有之事

神明　山王町　祭五月二日　神主　吉尾伊勢

中神明　山王町　祭六月十六日　神主　近尾河內

天滿宮　柳町　祭三月廿五日　別當淨禪寺

聖廟の御事は神社に詳なり當社尊像は法性坊尊意の筆と承る敷地前は鮎川のはたに有之元祿年中鮎川洪水にて柳町へ移す

祇園　南新町　祭六月十五日　別當圓隆寺

祇園緣記に云天竺の地に國あり九相其國と名く吉祥と名く其國の中に城あり城中に王あり牛頭天王と名く又武谷天神と名く娑竭羅龍王女を娶る後とす八王子有其眷屬八万四千六百五十四神と云

白山權現　中野町　祭三月朔日　八月十三日　神主　平尾大和

中野町の產宮なり伊弉諾尊號妙理大菩薩近年春の祭に神輿巡行あり

鹿島大明神　磯部　祭三月十二日　八月十日　神主　近尾河內

往古神躰樫の葉に乘て神通川有澤へ流寄り給ふ依て有澤今の舟渡場の邊に社ありしか　正甫公御代磯部の地に移し給ふ今の社なり

愛宕　舟橋向　愛宕町　祭六月廿四日　別當不動院

本地勝軍地藏大菩薩

稻荷　稻荷町　祭三月十八日　別當照岸寺

上宮土祖神中社倉稻神下社大山祇女と云

稻荷　千石町　祭四月廿六日　別當祐眞院

熊野彌三左衛門稻荷と云

土手神明　西田地方　祭三月十一日　八月十一日　神主　吉尾伊勢

天明二年より初めて神輿巡行

諏訪大明神　諏訪川原　祭八月二十七日　神主　近尾河內

往古は大社のよし中絕明和年中再興す池あり廻り三四十間斗池水深さ計べからす傳て云此池信州諏訪の湖へ續くよしなり

右の外秋葉大權現金毘羅權現諸寺修驗著し鎮守祭禮の分は略之
府内の修驗略之但し袈裟頭兩寺は左の通

東林寺　妙雲寺

御城

昔は安住の城と云神保家三三代居城其後朝日山の麓より加越の爭始りて末森鳥越等の合戰にて天正十三年九月五日佐々降參より大納言利家公御領と成り斯くて守山へは利長公入らせらる富山の城へ前田佐州入らせらる其以後慶長十三年利長公富山へ入らせらる西は安養坊呉服町より東は新庄水橋迄御家中家建續けり町家は鵜川の端より諏訪川原磯部木町まで建續けり扨四年富山に御座なされける然るに鵜川の端卷屋彦三郎といふもの三月十八日出火御城を初富山大略燒失す　利長公高岡へ入らせらる其跡山本清三郎支配のよし其後寛永十八年十月中旬利長公新たに成政降參にて新川一郡は太閤より成政に被下置かる其以後肥後國を下されける國中一揆を鎮め上洛の節攝州尼ヶ崎に切腹なり依て新川郡太閤の御藏入になりしなり扨土方勘兵衛雄久と云は尾州犬山の城主にて織田信雄卿の臣なり佐々降參の節信雄卿より太閤へ使者に越されし人なり　利家公とは御外戚方の御緣類とかや然るに信雄卿秋田へ流人と成給ふ土方も浪人して加州へ來りける加州より太閤へ伺ひ給ひけれは新川郡内布市村の南にて一万石土方に下されける土方米と云是なり其後新川郡も皆御領分と成右一万石の地公領なる故百姓共驕超過し犯科人など逃入りし故御願の上能州かいそ黒島等の一万石と替りける也其後の事略し末卷に記す

舟橋　船橋のこと末卷にあり

井田川山田川神通川落合て此橋を通るなり往古は此所舟橋はなくて舟渡しなり　利家公御代洪水の節夜中渡舟破舟して人多く溺死す依て其節の御下知狀の趣にて今も出洪舟橋切分けたる時は夜中舟渡を禁せらるよし橋舟數六十艘余鐵の大鎖二筋を以て橋舟を繋く舟長さ六間余橋板長さ五間餘常は三枚並外に脇板あり

舟橋や空も鎖にわたる雁　野州日光不究

舟橋やわれを帆にして風冷し　三四坊

婦負郡神社佛閣名所舊跡

大底神通川より東を新川郡とし西を婦負郡とす然れども神通川を隔て八ヶ村新川郡と有其村々人交る所も有往古の謂はれ有る事なるべし又古老の物語には新川郡の内馬瀬口といふ邊まで婦負郡にてありしとなり

西岩瀬

昔は石勢と云しなり又以波世とも有名所方角抄には岩瀬の渡り能登の國の分なり岩瀬と云所能州にも有や此西岩瀬昔は北へ廣く今の所よりは三里余北へ出たる所なるよし岩瀬の森とて大きなる森並岩瀬野といふもありしよし

傳て云此西岩瀬は大湊にて甚た賑やかなる所のよし古へ此所に名高き梅ありて　帝へ貢とす依つて梅津の湊と勅名ありしよし梅津の湊と申けるよし

新拾遺　いはせ野に秋萩しのき駒なへて
　　小鷹狩をもせてや別れん　　家持

家集　いはせ野の鳥跡たてゝ箸鷹の
　　こすゝもゆらに雪はふりつゝ　　定家

打出

昔は三千軒程家數あり驛宿にて繁花なる所なりしよし此所に花塚の松といふあり昔此地繁花の節遊女あまたありて其中に花といふ女わきて時めきしか病にかゝり死たり其墓に松を植るしか年經て大木となりし由判官義經奥州下向のとき此松のもとに休給ひ辨慶に仰せけるは此松見所多し見るにあかぬとありよし里人の云傳へし

長岡山

御墓所延寶年中創建早晩勤行眞國寺光嚴寺下經妙寺大法寺下

百塚村

今御墓所の邊も百塚山と申けるを後に長岡と改りけるよし此村に富山遍花寺和尚一石に一字の妙經を寫し爰に埋み卒塔婆を建つ和歌あり

色も香も今は見得ぬと法の花後の印の石ふみの跡

百塚神明　祭八月十六日　神主　吉尾伊勢

牛ケ首祭禮とて毎年角力あり是を四万石用水祭といふ其かみ山本與四兵衛と云人此用水を致し上下の地四万石の田水を掛る此時より始まりけるよし此所に又一社あり祭八月二十一日是を新郷の祭と云

五福山　古城

安養坊山と云七國志には安寧坊と云大平記に桃井播磨守居せしよし見へたり天正三年八月佐々成政退治として秀吉御出馬安養坊五福山に御陣所有此時に　利家公隨侍被成し事有今の太閤山とは是なり事は末森記にくわし

七面大明神　祭七月十九日　富山立像寺

五時谷と云此山の麓に鳥居あり其邊昔は神通川流けるとなり今五艘村といふ所は舟五艘にて渡したる所とも云又舟五艘此所に埋みし故とも云天正九年より川の流は東へつきしよし云傳ふ

五福村

五郎次郎則重と云鍛治の居せし所なり鎌倉五郎入道正宗の弟子なり

駒見村

内山大臣と云人居せし所と云古老の説あり又此里にゆうゆうと云老尼あり夜は犬となりさま〳〵

妖怪をなしけるか或時山伏に足を切られ夫より此里にすまず其後三年ほと經て射水郡あら山と云所より駒見八右衛門と云人の方へ書狀をこしたり犬の手跡なりとて人皆是を見たりとなり

八幡　天長八年八月十五日勧請

古は此社布目村にありて大社なり別當は布目村眞福寺なり越後長尾勢越中守山を攻めし節燒拂ひけるよしなり

北代村

往昔は眞言宗の寺二十四ヶ寺有しも悉く斷絶し其内光明山極樂寺のみ今もあり此寺に神保氏の高札其外書物あまたあり此邊は甚繁昌なる所なりし由此村の野に長者屋敷とて跡あり其姓名しれず此長者の唄とて近頃まであたりの者歌ひしは○うるし千ばい朱せんばい小金の鶏ひとつかい朝日さす夕日かゝやく木の下にみつはうつ木の下にあるとうたいける又此村にすゝめの森と云宮あり古へは川筋にて蜆貝を積たる舟則島となりけるを宮地となしけるとなり此森の形舟のなりに似たり今も森の中に蜆貝のから多く有りすゝめは蜆の云誤か

寺町村

寺屋敷墓所あり是は海陽山寂照寺とて京都本福寺の末寺にて大寺なりしと云

金屋村

此村の内西野と云所に少の揆立の跡あり古木曾義仲北國通り攻登り給ふとき宿せられし所なりと後代の印とて木賊を植る置かれしとなり近き比まで多く木賊生たり昔は有澤の舟渡し金屋村かゝりの瀬といふ所まで舟つきけるよしほせり坂通り往還なりと云ほせり坂祭禮は毎歳八月六日にて相撲あり此邊を古澤屋仁右衛門と云もの開發田とすよつて古澤ひらきとて今もあり又仁右衛門とも云

安田村

瀧の宮と云あり瀑布あり此瀧にうたすれは頭痛腰痛治すると云此以前群集せし事あり又癩病を治すとて癩が瀧とも云又古城跡あり　利長公岡崎備中を置かせ給ふ所なりと云

しら鳥　古城

金屋村の上の山なり神保長元是を築き其後は加州より岡崎備中片山伊賀を入置かせらるとなり其後岡崎は安田村に城を築てうつり片山は五福村大がけといふ所に城をとり立居せり今の伊賀城是なり

友坂村

小宮あり古越中大社三十所有て其一つなりと云又明坂山とも云此宮の高に糠塚と云あり此所より雨降り静なる夜又は晴夜とも火玉出て神通川近邊を回る是を糠塚のふら〳〵火と云今もあり近き比まで御旅屋ありしなり

長澤村　眞言宗　閻王山　各願寺

文正天皇大寶元年勅願寺と云傳云此各願寺は天台宗にして比叡山の末寺と一躰にて坊も三千坊あり越中より東は此各願寺にて灌頂などせしと云私云大寶年中は天台宗興行より七十年斗前なり文武天皇の御願天台宗とは非ならんか是に依て山門の衆徒大きにいきどふり强訴に及ふ灌頂等停止せしむるよし勅使各願寺え下さる各願寺の衆徒等似せ勅使なりとて是を殺害す今の勅使塚是なり依之叡山の衆徒大勢極月下旬越中に馳向嶽王山を攻む一山の衆徒并郷民防戰す寄手戰負けて極月晦日三戸田まで引退て各願寺の衆徒等油斷して本堂へ登り郷民も家々に歸りける此虚をはかりて三戸田より山門の衆徒急に押寄けるに不意の事なり何ひとつ備もなければ即時に責落されて堂字を始め三千坊一時に燒拂はれけるとなり此節兒大勢ありしが谷へ追おとされ切殺されける其所を今に兒谷と云又嶺つゝきに藏屋敷と云所あり今以て燒米あり又花水谷の上に清水あり各願寺の閼伽に汲し所と云又しらかけ谷と云所清水あり此水日中に器に汲入るゝに赤光ちらりと霞のやうにちりて跡もなしふたをして其ふたを明るとき又もとの如く赤光たつと云此長澤にて應安二年桃井播磨守の息中務少輔直和出張して斯波義將と戰ひ討死せしよし治乱記に見得たり王代一覽にもあり前後新川松倉古城の條下に記す

羽根村　古城

城主不知

富崎村

此所に鑄物師有て天福年中の龜鑑あり所の傳へには勅筆なりと云此綸旨に郷の名多く連れり然し勅筆といふと如何されとも一行一句　御震翰なるや不淨不禮にて拜見せしもの立所にたゝりある事掲焉也當時は祠に納めて宮とし二月九日を祭とす御綸旨祭といふなり天福は八十六代四條院の年號なり

瀧山　古城

水越入道と云人取立其後神保越中守居城とす越後の上杉家と合戰して越中守戰ひ負け自害しけるそれより越後爲景碩波郡增山の城へ取かけ是も勝利を得られ歸陣の節油斷して終に討死せしと也其後神保の臣寺島牛之助同甚助此城に居せし所に佐々成政是を責む依て大戸山へ引退く其後牛之助甚助成政の幕下になるといふ此說先年お尋に付書上之趣なり

按するに此一件舊記に據るをしらす佐々氏は信長より神保かひそへに越前より遣はさる元より神保と佐々は緣者なり然れば神保の臣たる牛之助と佐々の取合ひ疑ひなきことにあらず越後爲景も本書には謙信と有しを爲景と記せしなり謙信にては前後都合せざるなりくわしく末に記す

下瀨村　古城

釣瓶か城と云神保安藝守築之由

三の瀨村　古城

高山の城と云神保安藝守築之由

城生村　古城

是れも神保家のかき立のよし其後あき城となりてありしに近き比齊藤治郎左衛門又は一鶴といふ人井田の城より城生の城へ移る然るに飛州白屋筑前守越中へ切て出て岩城村といふ所に付城をかまへ齊藤を攻む齊藤危く覺へけれは越後の長尾家へ加勢を頼みけるに越後後詰あるゆへ白屋は飛州へ通返りける其後佐々與左衛門神保氏春兩人齊藤を攻動す佐々は葛原村の上に付城をなし神保は城生の村なる天狗平と云所より責ける其時氏春の方へ使者を以て申遣しけるは御望は達すべしとなり氏春の返事に其方繼父淨舟我等敵なれは淨舟首を渡されは陣を引へしとなり是に依て齊藤が家來齊藤喜右衛門豐島茂手木淨舟をたばかり首を打落し氏春へ遣しけるに又城を明け候へと云入る依て城を明けて與左衛門へ渡しけり則ち與左衛門居城とす齊藤は本國常陸の國へ引越ける其後利家公御領となりて青山佐藤を入置せらる十二三年居住にて後魚津へ被遣其跡へ笹島三藏を石動より引越入置せらるとも也傳云此齊藤次郎左衛門常々不道にして郷民を苦めける故近郷之を悪む佐々氏に追出されて城を退く時に近郷の百姓共老若群り見物して大きに罵り笑ひけれは齊藤以之外立腹して馬上にて自おつとり一矢是を射る表にすゝみ出たる百姓の左の眼に其矢當けるが其百姓夫より代々家の主たる者皆左眼しいたり近比迄其末孫ありて一眼なりけるよし

井田村　古城

此城も齊藤次郎左衛門が築ける由なり井田川の末は神通川へ落合なり同村に舘跡あり其主しれず

家數ありて町名は下町中町東下町四十物町東上町上諏訪町下諏訪町鋺町上新町上西町下西町等一ケ月に六ケ日市あり五ケ山野積谷其外近郷より人多く出る京錦苧紙類所々蠟漆を商ふ又時に栗柿椎茸蕨などを商ふ事あり

聞名寺　西　同

鍾の銘に桐山下野聞名寺とあり其先飛州にて願智坊と云覺知上人より願智坊執持鈔受與之と云々越中飛驒に末寺四十三ケ寺あり

山田谷　同

温泉あり諸疾并打身を能く治す藥師堂あり牛嶽大明神の社あり山田川あり此末神通川へ落合なり此川上にゆふ年といふ所あり魚止りの瀧と云あり此瀧より上へは魚登る事能はず依て魚止りといふよし此川の源は飛驒の國百瀧といふ所より流るゝとて百瀬川とはいふなり

牛嶽

高山より彌生の比雪消かゝる時牛の形に能く似たり依て牛嶽の名ありと云此山富山御領にては牛嶽と云峰より西の方は加賀御領にて是をば鍬先が嶽といふよし

按するに牛嶽は多分北向の山にて鍬先は多分西表の山なり然れば牛嶽鍬先は別の山と思はる鍬先か嶽は井波へ行道より能く見ゆるなり牛嶽よりは山もよく思はるゝなり

布谷村

此所に佐五兵衛と云古き百姓あり鴨田源氏渡部綱が子孫なりと此所の上に祖父ケ嶽とて頭形の宵の如くなる山あり扨又北山續き小井波と云所の高に夫婦山とて二峰連りて向へる山もあり

野積谷

或云野積谷は往古國司守護といふ者なく　帝へ金銀並京錦蠟抔を貢とす右に付都まで道中傳馬等の繪符被下今に野積谷杤折村武戸孫助が家嘉例谷村新開百姓小右衛門家に繪符四枚あり二枚は菊の紋二枚は桐の紋あるよし○野積谷名目

室牧谷　高熊　高橋　柴橋　竹内　中村　谷内　宮ケ島　尾久
窪　天池　追分　馬瀬　抽木　足谷　大道　下名　上名
次口嶺　野次口　和山　北袋　坂下　高尾　上野　細瀧
仁の谷　長谷
切谷　杉ケ平　瀧谷　廣谷　夏前　赤原　新谷　西ケ原　田以
野　内名　島地　谷　清水　花房　上牧　上後谷　薄尾
安澤谷　二ッ屋　横平　上中山　翠澤　杤折　名ケ島　土玉生　小谷
正間　平澤　吉友　大玉生　下畠　尾畠　無道原　倉谷　谷折
三杉　鼠谷　草水　入谷　上仁部　下仁部　大下仁部
東野積谷

獵師原　桂原　西松瀬　赤石　布谷　東川倉　下牧　西川倉　川桂
岩島　水口　上ケ島　宮ケ下　道島　下中山　青根　乘嶺　新名
高嶺　下乘嶺　八十島　上田地　東葛坂　西葛坂　油

野積谷支配人は天文年中より永祿年中迄は布谷村にて渡部源七郎大玉生村阿部新左衛門島地村湯淺亦兵衛杤折村武戸孫助此四人の者共谷の内才許のよし百ケ村餘の内上分二十七ケ村の二十三ケ村室牧二十七ケ村合七十六ケ村右四人取斗是を野積四谷と申傳え但し二十六ケ村は慶長以來の出村のよしなり

布谷村源次郎　次口村彦三郎
一後谷村彦次郎　乘嶺村平野治郎兵衛
大玉生村久藏　水口村太左衛門
小谷村清左衛門　中山村五郎右衛門

右慶長の比より寛永の比迄野積村才許人

布谷村左五衛　次口村彦三郎
上仁部村柿木五左衛門新名村屋後長右衛門

右正保より慶安の比まで才許人

布谷村左五衛　次口村新右衛門

右万治年中十村

布谷村左五衛　中山村德兵衛

右寛文の比まで

布谷村左五衛　次口村新右衛門

右延寶の比まで

布谷村左五衛　鹽村久兵衛代りに十村御扶持人役料三拾俵被下なり

右貞享年中

布谷村左五衛　高熊村仁兵衛

右元祿年中比より

布谷村左五衛　乘嶺村傳兵衛

右正德年中

或云天正六年五月五日今泉落城此時高安治郎右衛門中川佐兵衛妻子共々野積谷布谷村渡部源次郎方へ預り置候由

牛滑村

此所にも鎌信塚と云あり所の傳には越後景虎瀧山の城より增山の城を責め其歸りに此所にて討死せり依て墓有と云

按するに鎌信公にではあるまじ爲景なるべし其故は甲陽軍鑑に景虎村上義清に對面なされ仰らるゝは我等父の爲景越中能登加賀三ヶ國を心掛發向仕り度々攻合合戰勝利を得られたると申事を我等幼少にて父にはなれ爾と不存候近國なれば義清は結句某より能御存知可被成候爲景勝合戰の油斷致され越中にて討死は其かくれなしとあり是よく舊說に符合せり○同軍鑑に謙信公は天正六戊寅三月九日に越後春日の山の城の閑所にて煩出し五日煩ひ十三日に四十九才にて他界し給ふとあり然は謙信ならざること明らけし謙信公の代に管領職になり武名尤高し越後長尾といふを後人謙信塚と誤りたるなるべし○又外輪野に大構へ小構へと云所あり爲景陣を張られし所と云

蓮花寺村

神保越中守の墓あり事は瀧山古城の所にあり

上行寺　楡原村　法華宗

一村皆日蓮宗なり古より楡原法花とて名ある所なり嘸して此近邊楡原の保内と云ふ此楡原村に畠山六郎重保の墓と云あり所の傳へには重忠の息六郎にて此所に居せしに正月十五日此所の八幡宮へ參詣するとて風呂へ入ける所を野心の者有て討取しと云又說に六郎のゆかりの者有て此所に供養塚をきつきしとも云此說是ならんか

按するに足利時代三管領の內畠山能州穴水に在て越中も畠山恩補の國なれば其枝葉に六郎と云

人有て此所にて死せしか夫を賴朝の時代の重忠の息と思ひ違ゐならん元久年中相州二俣川にて北條義時と合戰して重忠一黨打死なり王代一覽に見得たり又此所にて昔千人切せしとて千人卒塔婆と云あり

森田村　眞言宗　常樂寺

觀音堂あり緣起云文武天皇の勅願大寶壬癸二年御建立なり本尊十一面觀音行基師の作御堂十一間四面觀音の護摩堂六間四面五大明王を安置す是弘法大師の筆なり惣坊都て一千坊在其後仁壽二壬申慈覺大師當所へ下向有て北方に三間四面の二重塔南方に慈覺自ら七日七夜千躰地藏を造立有て七間十三間の堂に安置す前堂本尊同大師の作聖觀音なり然るに前堂の下に靈水涌出十間四面の池と成池中より蓮花生じけるとなり又當山の坤に五間四面の大日堂有て諸國の齒骨を納む今の高野山の如し其後程經て天曆四庚戌年當山の座主夢想に仍て天神の社を建つ北野梅林山と號す又鎭守は稻荷大明神と云其後兵乱によつて破壞するとなり今も靈像は歷然とあるなり

黑瀨谷　法華宗　長松山　本法寺

傳記云日順法印は弘安五年壬午の出生日邁上人入滅の年なり薩染して台敎を學ぶ正慶二己酉年廿八年にて宗門に入元應元己未年本法寺を建つ應安元年戊申五月九日壽八十歲にて卒す此寺に法華經二十八品の繪圖あり傳云此繪圖は後醍醐天皇の嘉曆元年の春越中放生津の浦に夜々海上に光輝あり依之漁人網をおろして彼波の下をさぐり求む浮木の如くなる物を得たり披いて是を見るに二るに二十八の卷軸あり則越中宮崎の城主神保八郎左衛門へ献す時の人何の圖と知る者なし爰に本法寺の日順法印一々是を演說す依之本法寺に寄付して永く寶物とす又放生津の曼多羅寺は此圖繪の初めて上りたる所故此號ありと云へり

後醍醐の御宇に富崎村に神保家心もとなし但は別人か又は年號の違ひか猶追て可尋なり

鵜坂村　眞言宗　鵜坂寺

記云鵜坂大明神祭七月二十三日面足惶根尊の分靈なり本地藥師如來白鳳二年御鎭座

鵜坂の事は書々にあり昔は神官祭の日楮を以て參詣の女をうちし事は江州筑摩祭に似たり又故ありて田苗一夜に杉となりし故苗杉と云今もあるよし

鵜坂川渡る瀨おふみ我駒の
あかきの水に神はぬれつゝ　家持

いかにせん鵜坂の森に身はすとも
君が楮の數しらぬ身を　俊賴

直に行川はたゝかぬ柳かな　麻父

麥島村　宮有

此村の宮祭神追て可尋社内に樫木の古木ありて祭禮の日宿願の人此木に草苅鎌を打込と云今も其木に數本の鎌打込あり百を以て數ふべし後は此鎌の肉に包まれて中心斗見ゆるもあまたあり其鎌

を打時見たる人なしいつの間に打ともしれず又其木活生少もかわるとなし

へ　ろ　川

見かと川

此川昔神通川の内へ流れける大河なるよし今は跡斗也

西勝寺　西派　城生村に有

此寺古は同郡井田村にありて眞言宗なり親鸞北國下向の節弟子と成る其時の住僧改名して淨願と號す淨願卒去の後中絶す其後遥如師北國下向の節故あつて西勝寺再興ありて寺は城生村に建立す

明淳寺　西派　下井澤村に有寺尾と云

此二ケ寺並新川郡砂子坂村上宮寺遥如上人の御子の開基と云或云明淳寺は加州寺尾の明淳寺の分れなりと故に寺尾とも云よし

新川郡婦負郡寺院の數

三百九ケ寺内	百七十一ケ寺	金澤御領	淨土眞宗
	百三十八ケ寺	富山御領	東西
二十五ケ寺内	四ケ寺	金澤御領	日蓮宗
	廿一ケ寺	富山御領	勝劣一致
四十四ケ寺内	二十七ケ寺	金澤御領	禪宗
	十七ケ寺	富山御領	曹洞宗
三十九ケ寺内	十ケ寺	金澤御領	眞言宗
	廿二ケ寺	富山御領	法灯
二十ケ寺		富山御領	天台宗
十七ケ寺内	九ケ寺	金澤御領	淨土宗
	八ケ寺	富山御領	淨土宗
一ケ寺		富山御領	時宗

以上

射水郡神社佛閣名所舊跡

射水郡は北西の方に當りて多分海邊也

加茂太神明

下村にあり祭禮四月四日氏子とも牛乘兒乘と云て牛或は馬に乘射をなす其業競馬の如し

女　堤

傳云昔此堤を築きし時水口切れて水たくわへ難く度々修復を爲す時に女一人來りて此水口に人をつき埋むれは以後崩るまじと云里人しからは汝を埋むとて此女をとらへて水口へ築埋めしより崩れずとよつて女堤と云よし如斯妄說所々にあると也

伊勢領　或伊勢寮

甚だ古跡なり社内大木の杉松あまたあり由來追て可尋之此邊に往古馬寺と云伽藍有て丈六の佛像ありしとなり今も御頭御手などあり元文元年夏の頃唯生といふ僧阿彌陀の像を建立して其跡あり

小　杉　町　名

傳云此所は百合若大臣の居城地なりと嚴海ケ島の一揆退治の賞として此所を給ふとなり小杉に高

尾山邁花寺と云寺あり則百合若大臣開基と云

青　江　谷

昔越後の長尾爲景安養寺瑞泉寺など云大坊の謀にをちて穿に入て自害あり」古跡あり神保氏春の城跡と云もあり

翁德寺　萬松山

此寺に渡邊綱が元結並長一寸の黄金の觀音あり

橋　下　條　村

小杉の邊なり此所に寺林文左衛門とて古き家柄の百性今にあり金森法印の後統のよし此家寶物あまたあり鬼神太夫行平二尺四寸ある金作の太刀一腰あり渡邊の綱が太刀なりと云是は婦負郡布谷村左五兵衛が家にありしが故有て文左衛門か方へ來るよしなり

邁花寺　眞言宗

高岡と大門との間に邁花村と云所にあり此寺内に賴朝塚と云古き五倫石をのせたる塚あり如何なる故にて賴朝の塚此所に有しやしれず

高　岡

昔は關野と云慶長十四年八月十六日　利長公富山より御移よりして高岡と地名を改めらる由三壺聞書にあり今家數〃所謂定塚町古定塚町荒町片原町堀上町白金町大工町鉄砲町鴨島町馬喰町旅籠町橋番町檜物町川原町下川原町二丁町研屋町守山町木舟町小馬出町一番町三番町源平町平前町梶原淵町油小路中島町御馬出町横町谷屋町此外に八九町離れて木町といふ所あり家數百軒斗りあり御馬出町に金子何某と云醫師あり此家は保元頃の金子十郎家重が後胤なりと則重が鎧干今所持のよし其外古物の武器もありよしなり猶追て可尋也

御　城

慶長十四己酉年三月十八日富山の御城并町不殘燒失依之小津の城へ暫時御移り夫より關野に城を御築關野を高岡と御改め同年八月十六日高岡へ御移也同十九年己丑五月廿日高岡にて御逝去なり依之御城御普請全く成就ならず今は御本丸の跡鹽藏となり御堀等古の通なり御城の後千疊松原といふ所あり甚絶景なり

熊野權現祭三月十六日　社領十七石　神主　關三河守

當社に加茂大明神天滿宮御相殿なり古此社かわらけ町にありしを瑞龍寺等建立の節先つ此所へ遷座すべしと　利長公御指圖ありしより此宮を先の宮と云此社の記に云平判官康賴丹波少將成經俊寛僧都硫黄ヶ島へ流されたるよし平家物語盛衰記等にあれども仔細あつて實は此所なり康賴熊野權現を建て祈りし事は此權現の事なりとあり又俊寛の塚氷見にありと云又或記に肥前國加瀬の庄に清勝寺と云寺有此寺俊寛の建立なり委しき事は清勝寺の緣記にあり」となり是は成經康賴硫黄ヶ島より歸京のとき密に僧都をぐして此加瀬の庄にかくし置年經て俊寛死せるとあり追て可尋なり

稻荷社　右同斷にあり　社領　二十石

瑞龍寺　高岡山と云禪宗　寺領　三百石　洞堂銀　四十五貫余

東衛院　五十石　法性庵　三十石

林洞庵　三十石　龜古庵　三十石

瑞龍寺御建立は　利常公御代明暦二申年より萬治元戌年迄二ヶ年にして全く成就なり諸堂の結搆筆に及びかたし屋根は不殘鉛瓦を以て葺かせらるゝ山門は天保年中に建置せられしとも云瑞龍寺諸堂の棟梁は山上善右衛門善廣とて工匠の名人異國の經山寺のさし圖を以て造りけるよし誠に日域無双の伽藍なりと云

繁久寺　禪宗　寺領　五十石

境内に　利長公御墓所甃石疊石の柵其結搆筆に及ひ難し御寶藏も有之御墓の前に七重の石の塔燈籠あり高さ二十丈余と云丸き石中に有之を千人釣の石と云此燈籠二基被仰付大坂より來りしが故有て一基は建られず高岡の脇なる關野川の邊に石の仁王幷石の燈籠一基埋めさせらるより近年關野川岸崩れて埋められし所今は淵となり水の澄みたるときは水底に石の仁王幷燈籠見ゆるよし繁久寺より瑞龍寺まで直道十八町あり松原なり一丁毎に左右に石燈籠一基宛建てらるゝ

大野路

万葉　大野路はしはし芝原しけくとも君の通は、道廣からん

古老の物語に高岡の邊蓮花寺近所しゆくし橋といふ所より北の方放生津濱まで廣野にて是を大野路と申せし由

中古治乱記四十卷に上略其後景虎北國の諸將と一且和睦しけれども武田信玄も彼國を伺ふ他人の爲にとられては我北國にある甲斐なきに似たりとて再ひ勢を催ほし永祿二年七月廿四日越中へ發向し高岡に旗を立つ彼國の大將椎名神保此事を聞きかれも同じく軍兵を引率して景虎に對陣す此時景虎下知を加へ其夜子の刻に八手に分つ先陣は河田對馬守貞政大關阿波守盛次其勢ひ千騎二の手は石川備後守爲之高梨源五郎政頼十騎三の手は新津丹後守正世本庄美作守光重本庄彌五郎光信千騎旗本の左は毛利上總の助爲秀近藤出羽守嗣成旗本の右は山岸宮内大輔貞臣飯森攝津守重之鳥山因幡守義胤十騎旗本の先手は水原壹岐守澄則鬼山谷小治郎親章其外宇佐美駿河守實正嫡子民部少輔實忠唐崎孫治郎吉俊黑金孫太郎保勝北條五郎景則大實五郎兵衛尉時泰内藤主助馬正重柏崎彌七郎時貞以下千余騎後陣は長尾左衛門尉景村長尾小平治景連越野民部丞景信竹俣筑後守業家等千騎遊軍には保田伯耆守義正平賀志摩守頼直苅和彦太郎實景飯野源四郎景久次田若狹守忠永千騎又兼てより偷を敵方へ入て暇隙をうかゞひ知り前後左右より乱入し十方に相分れ在所を不定切廻る越中勢又大に打負て四角八方に遁去る中略景虎軍に打勝て首ともを實撿しけるに冑首三百二十一級其外は雜兵たり則高岡にさほ結び廻し彼首七百六級をかけならへ勝鬨を三ヶ度とり行ひ越後の國へと歸りける此等を以て高岡の地名は古よりありしや追て可尋

そふ川

此川の鱸は名物にて鰓の下のひれなし松江の鱸に同じと傳ふ

鱸釣る江を我か里のふかめかな　　倩筑

有磯海

万葉　有磯海浪間かけわけかつく舟の
　　いきもつきあへす物をこそ思へ

夫木　大崎の有磯の渡り霧こめて遣かた人も
　　舟よほふなり　　孝民

万葉　かゝらむとかねて知せは越の海の有磯の波も
　　見せましものを　　家持

同　大磯の有磯の渡りはふ葛の行衛もなくやまこもかくれ有磯にかよふ芦たつの踏をく跡は
　　戀わたるらん　　よみ人不知

後撰　島かくれ有磯にかよふ芦たつの踏をく跡は
　　浪もけたらん

拾遺　かくてのみ有磯の浦の濱千鳥よそに鳴つゝ
　　戀や渡らん

同　有磯海の浦と頼みし名殘のみ打寄てけるな
　　忘貝かな

人知れぬ思ひありそのの浦風に波のよるこそ
　　いはまほしけれ

有磯は越中海の惣名にもよみ又大崎の有磯といふは別か傳には蛯江より堀岡までの間をいふともまた氷見のあたりなりとも云

越の海

千載　天津空一つに見ゆる越の海の浪をわけても
　　歸るかりかね　　頼政

夫木　越の海にむれてゐるとも都鳥みやこの人そ
　　戀しかるべき　　順

越の海は越路の海の惣名なるべし射水郡にはかぎるましきなり

放生津　町名
八幡宮　大社也　祭八月十五日
氣比の古宮

戀の山と云は此放生津の邊にありしと云

按するに放生津の邊海はたにて古國府までは山なししかれとも戀の山とは地名にて山にてはな

きか追て可尋なり

總の山しけき小笹の露分て入初るより

ぬ る 、 神 哉　　神祇伯顯仲

那　古

續古今　月出て、今こそかつれなこの江に夕忘る、

あ ま の 釣 ふ ね　　光　俊

新　續　波さわぐなこの湊の浦風に入江の千鳥

む れ て 立 つ な り　　伏見院

夫　木　夕されは汐風吹くなこの海の寒き洲さきに

う つ ら な く な り　　鷹司院

同　なこの海の汐の早ひにあさりにし出んとたつは

今 そ な く な り　　衣笠内侍

同　なこの海あれたる波の島かくれ風にかたよる

す か の む ら と り　　經　正

新續古　徒らに立や果なんたづの啼なこ江の小菅

む す ほ れ つ 、

越　湖

今は放生津の潟と云是なり方角抄には佐渡國にありと此湖の土を毎春とりあげて近郷の田の養とすしからざれは稻實ならずよつて春は百性多く舟を入泥をとるなり然るに此湖中に大さ甲の渡り余の鑑ありて人をとる事年毎にあり是をさくるの術なし明和年中に近郷の百姓寄合相談して此湖中に筑島をなし祠を建毎歳六月祭とす夫よりして人をとる事なし是を蹠祭と云此湖古は至て廣かりしが今は段々築出して田畑となして見る所廻り一里ばかりなり

碎　田　川

放生津のあたりと云追て可尋

二　ッ　塚

太平記に云越中の守護名越遠江守時有舍弟修理之助有朝甥の兵庫之助貞時三人は出羽越後の宮方北陸道を經て京都へ攻登ると聞へしかは道にて是を支へんと越中の二ッ塚と云所に陣を取て近國の勢共を相催しけるか、る所に六波羅既に攻落されて後東國も軍起り鎌倉へ寄けるなどさま〳〵に聞へければ催促に從ひて唯今まで馳あつまりたる能登越中の兵放生津に引退き却て守護の陣へ押寄んと企てける中略一家の輩普代の侍わづかに七十九人元弘三年五月十七日丑刻一時に腹切て兵火の底に燒死ける其亡魂後も此地にとゞまりけるを越後より登る舟人此浦を過るとき見けると委しく本書にあり

古は籠の渡しなりと云源義經奥州下向のとき此所にて渡し賃なく渡守に直垂を給よし云傳へり

古國府

勝興寺西派院家門跡蓮子寺領公儀ゟ七十五石　加州ゟ二百石

越中四郡一向宗西派の惣祿興力の寺四百ヶ寺余あり七國志に越中の大坊安養寺とあり是なり

寶物は三國傳來之彌陀赤柄樹彌須喝摩作、髮ミヤリ釋迦之髮毛、弘法大師作の厨子、後光鳩摩羅什の作、岸浪の掛物織田家の寶物なりしを佐々成政より申たる品ありて大閤秀吉公より此掛物に添て七十五石の地を御寄付なり矢田村と云所なり右の外靈寶多し加州より御寄付の品最多し加賀宰相吉德公之八男時次郎勝興寺へ延享三丙寅の秋御入院號尊丸寶曆六丙子閏十一月御剃髮明和七寅歳御歸俗加州へ御歸國其節勝興寺へ永代米千俵被爲付

一の宮　別當慶高寺々領十石

氣多大明神或云高瀨大明神祭神大巳貴命延曆三年三月神階正三位養老二年の開基或云礪波郡に一の宮高瀨大明神あり然らは越中の一の宮兩所にあること如何追て可尋之

伏木町名

舟付にて遠國より人あつまりにぎわしき所なり

光久寺　一向宗東派

初眞言宗にて玄巢院と云又長谷寺とも云康永二年改宗してより寺號を光久寺と改む

岩崎　赤坂山　桑ヶ池　義經衣掛皂角　蝙ヶ洞伏木より永見へ行道なり此海邊景色筆に尽しがたし　機織の井戸　弓の清水　組板石　判官雨はらし　女岩　男岩

義經奥州下行の時大石の下洞になりたる所にて急雨をはらし給ふとて今に雨はらしと云

唐島　辨才天

此島へ舟にて往來す景色甚だよし風あるときは浪あらく通ひがたし

守山城跡

大悲院　眞言宗

七國志に越中守山の城主神保安藝守とあり御領になりては　利長公入らせられしよし見へたり

昔後醍醐天皇第十八番目の皇子能州配流に放生津の町人大西彌兵衛と云者深くいたわりまいらせ御宿を申ける夫より此守山へ移り給ひ牧野村といふ所にて御歌あり

思ひきやいかに越路の牧野なる
草の庵にかりねせんとは

守山の奥に陵あり然れば爰にてかくれさせ給ふと見得たり高岡の守山極樂寺御菩提所の由緒あり

しより追て可尋なり守山の奥に淨土山と云嶽ありて數丈の瀧ありその下に谷數七ッあり絶景の地なり

岩ヶ淵

文祿二年八月向井彌八郎印牧藤兵衛と云浪人劔術の仕合ありける事三靈聞書に見得たり

多　枯

多枯の浦底さへ匂ふ藤浪をかさして行かん　　人丸
みぬ人のため

玉葉　沖津風吹こす磯の松枝にあさりてかゝる　　宗泰
たこの浦藤

續後拾遺　さなへとる多枯の浦人此ごろやもしほも吸ぬ　　教定
袖ひたすらん

拾遺　さなへとるたこの浦人夏かけて苗代水に　　家隆
入江をくらし

夫木　朝氷鴈もかよはす成にけり何をよすらん　　よみ人不知
たこの浦波

新拾遺　五月雨は古江の森の笘屋かた軒まで　　法印宗圓
掛けるたこの浦浪

古　江

西田國泰寺　禪宗　寺領十二石三斗九舛

清泉國師開基由良派の本寺足利尊氏建立

二　上　山

二上權現　別當慈尊寺　本覺院　金光院

昔は大社にて坊も三千坊ありしと云傳ふ養老元年の開基と云二條家御筆の古き額あり仁王門あり此前に小橋ありて夫より南の方千保川と云あり手洗野材木町など云古名ありて今は田畑にて人家なし

養老寺　寺領六石七斗九舛二合

城　跡

傳云神保安藝守氏春繩張越後勢攻落すよし後に御領となり菊池大學をさし置かれけるよし

續古今　うは玉の夜や更ぬらん玉通二上山に　　家持
月かたふきぬ

玉くしけ二上山に鳴鳥の聲の戀しき　　家持
時は來にけり

澁　谷

万葉　しふ谷のさきのありそに寄する浪　　家持
いやしら〳〵にいにしへ覺ゆ

同　うまなめていさうちゆかぬ澁谷の
寄する浪見ゆ清き磯間に　家持

三島野　方角抄に二上山の邊とあり

新續古今　いかに寐て都の夢をみしまの、
淺ち苅敷露の手枕　景守

新拾遺　みしま野や暮れはむすふやかたおの
鷹も眞白に雪はふりつ、　爲家

續拾遺　三島野のあすちか上葉秋風に
色付ぬとや鶴なくらん　前内大臣

阿尾　青尾とも書萬葉に英遠浦とあり

見るめかり思ふ人にはあをの浦
夕かほしろき磯の屋の月　阿尾の人詠

城跡

此所は菊池伊豆入道十六郎居せし所なり末森記七國志にあり其菊池の放せし鷹の後なりとて今も鷹の多くありて巣を作るよし

布勢海

勅撰　布瀨の海沖津しら波ありかよひ
彌年のはにみつ、忍はん　家持

續拾遺　布瀨の海有磯によする白波の
かさしに匂ふ春の浦藤　定爲

後撰　擊絶るす聞へす渡る布勢の海に
啼くやちとりのあり通ひつ、　爲藤

拾遺　咲か、る布瀨の浦はの藤波に
うつるかけのみ松はみへつ、　衣笠内大臣

氷見　昔は火見と書しとかや

神保安藝守父子守山より切て出て氷見へ働けるに阿尾の城より菊池父子片山高畠なと是をさ、へ戰ひし節村井かけつけ守山勢を討取追返へしけるよし七國志末森記にあり

産物畫表莫産

天神山
鹽野山

嘉永年中十郎藏人行家向ひて合戰の事平家物語等にあり末森記に倶利伽羅を右に見て飯山と末森の間志雄越とあるは爰か

射水川

此射水川の事其所しれす射水郡の川は皆々礪波郡より流れ出るなり一説に六道寺川を射水川と云とも云へり

そうかう村　惣郷と書

能登越中の境なり能登そうかう越中そうかうと並んで有る村なり此越中そうかう村の田畠兵衛と云者末森の合戰の時忠節ありて近邊の柴山を被下けるよし末森記にあり此田畠兵衛は礪波郡今石動の條に委く記之

二十九日村

二十九日村と書てひづめ村と号す珍敷となへゆへ爰に記す算學博士善爲康は治暦二年十八歳にして都に登り算學博士善爲長を師としてその道に長し又進士明經に通しぬ堀川院算術を賞し給ひ博士となし後には朝議太夫に至る保延五年八月九十一歳にして卒す越中國射水郡の人なりと元享釋書にあり

礪波郡神社佛閣名所舊跡

加禮谷

此加禮谷に四尺はかりの三稜なる石を建て三郡の境とす北は射水郡東は婦負郡西は礪波郡とす

三十三塚

此由來しれす追て可尋之

增山村　古城

城山は增山村の後東の方なり傳云此城主は熊川宗範なりしと越後爲景婦負郡瀧山の城を攻落し夫より此增山の堅を攻落しけるよし爲景數年此城を攻落さんと度々寄せけれども要害堅固なる故寄手利なしよつて水の手を切てやうすを伺ふさて外曲輪にて馬を洗ふ所を麓より見れば其水滿々として瀧の如しよつて寄手氣を屈しけるに越中運の尽る印にや此馬を洗ふたる跡へ雁の多く集りさわくを見て白米を以て水の如く見せ寄手を欺きし事なりと察して流水の手を堅く塞きけるゆへ城中菩みけるよし

又云兵糧の通路を塞く然れども城中くるしむ躰もなし爰に妙淨と云老尼此邊にありて寄手の者へ教へけるは此城の兵糧運送の道は東の方の林原を通路として婦負郡より送ると云よつて此道を數日塞きけれは城中つかれて五月十二日に落城すと云今も此林原山越に一里斗續けり又此林原に大きなる窟あり此内へ人這入れは終に歸らすと云寶永年中の事なるよし又此城の向ひに淨達社と云淨土宗の寺あり又妙淨ヶ峰と云山もあり兵糧の通路を敵におしへける妙淨が家跡と云

增山の城は大手は西向と覺ゆ尤も九折にして此所は馬の往來もなるべきなり其餘は至てさかしき山なり本丸といふ所は高く本丸より一たん高く見ゆる所の境に松の一木見ゆ此下に旗台石とて中窪なる石渡り二尺余りあり是に穴眞中にありて水一舛を盛べし俗に此水石中より湧出て四季に絶へすと云予里人に問ふに甚非なり此石吸はせは重て雨降時まで一滴もなししかし至て堅き石にて

極暑にも水干るとなしと云

鍬先山

婦負郡牛嶽山の片面なりと云その分度を思ふに牛嶽とは別の山なるべし形は牛嶽に甚だ似たり増山の南に當れり

淺野谷古城

是所を鬼か城と云昔鬼の住みし所なりと怪しき事なりいかなる人の城ともしれず

千光寺　芹谷　眞言宗

通りより門前まで入所八丁あり此邊に鐘か淵と云所あり昔千光寺の鈞鐘兵乱の節入しとなり今も晴天水澄みたる時は水中に鐘の龍頭見ゆるよし也

熊野山

水戸田の邊なり昔熊野權現の大社ありて四十八坊ありし所なりと云

別所七山

此別所七山は山の尾七ッ喰違ひ出て其間を川水めぐり流るゝなり景色面白き所なり此七山の傳説は昔頼成と云福有のものあり一人の娘を持つもとより容貌比ひなし人あまた心を寄する一日頼成云此高の穴田の地は水の手寄なき野なり是へ水を揚る人ならば我娘を嫁せんと此事あまねくい、つとふ爰に一人の男來りて云此野に水をあげは娘を予にあたへんやと頼成諾すその夜後の山を突

叛て川水野へ至らんとす頼成是を見て是人間の業にあらず龍蛇のわざなるべしと思ひ合する事ありとて多く人夫をかけて水口を防きて是を止む如斯して所々に山を築きて止めけるよし是今の七山なりと云又此邊に頼成村といふあり頼成が居せし所なりと云妄説なれども里人の云傳ふ儘に爰に記す

中田

軍書に盤若野とあるは此邊なり中田をはんにやの庄内貞重の郷と今もいふなり

貴船古城

越中貴船の城主石黒左近水野采女右兩人信長の下知にて江州佐和山にて切腹の事七國志にあり考ふるに盛衰記に越中に石黒氏有壽永の頃より天正の頃まで石黒氏子孫つゞきて此左近にて絶へしや追て可尋之末森の合戰の節は佐々成政より佐々平左衛門を此城に置たるなり其後　前田家御領となりて津幡の城より前田左近秀繼公御入城天正十三年七月廿七日大地震に此城崩れ　秀繼公も御他界なり其節庄川の川口辨才天或は堂塔民家顚倒飛州山まで崩れたるよし三禮聞書に委しくあり又水牧村と云も此邊にあり

安川村　藥勝寺　禪宗

藥勝寺の後の山に禁裏塚と云あり二間斗の大壇ありて四方三段あり皆石にて疊みたり上に五倫石あり傳云

後花園院の皇子の塚なり文明の始藥勝寺の後の山中に閑居し玉ふ是は京都大内山名の乱をさけて住玉ふなり三年目に增山の城主の爲に殺し玉ふ其時增山の城は佐々成政の持と云右皇子の法名は稻增親王とも德大院殿と云按するに文明の頃增山の城成政の持と云は如何其時と云は其後の書誤と見るべし後花園院は在位三十六年文明は十八年にて改元天明三年まで三百十五年なり後花園院は天明三年まで三百五十五年になる

九人塚

藥勝寺より南往來の脇にあり杉の大木あり其下に五倫石崩れ散つてあり前云皇子薨去の節戰死の公卿九人の塚なりと云公家塚とも云

座當落

井波へ行道にて庄村の末なり庄川の緣にて片々は高山峙たちたり此山の根に岩ぐりの用水あり座當落と云所は庄川の切岸にて道の曲りめにて岩石手を立たる如く魚鱗を重ねたるごとし甚だ危く至て道幅せまし昔座當落て死したるとて此名あり此邊夏中毒蛇蝮多し

金屋村

此邊葱名物なり昔禁裏へ葱を上けたるよし道中驛々にて越中の葱傳馬とて時付にて往來せしよし

やち川

昔此あたりに親鸞の俗弟あり弘長二年親鸞京にて遷化のよし聞ゆ折節此俗弟雜魚を得て腸をぬき砂を洗ふ時に親鸞の遷化を聞て大に驚嘆して彼の腸をぬきたる魚を此やち川へ捨てけりそれよりして此川の雜魚今もはらわたなしと云

井波古城

井波入口に松林の岡あり是古城跡なり佐々成政の臣に前野小兵衛居せしなり軍士二千騎入置と末森記にあり

瑞泉寺　東派末寺三百五十余ヶ寺

門跡蓮子本堂西向十七間四面中の間五間四方脇の間四間五間左右同じ樣側二間なり玄關四本柱さし渡し一尺三寸樣板厚さ三寸五分床高さ五尺余總槻造り鐘樓山門等は先年燒失の後無之本堂も近年出來なり

此瑞泉寺且那加州に多く越中には些し凡三千斗あるよし尤寺中に坊官侍等あり本山の外にて坊官を仕ふ寺は瑞泉寺而已のよしなり後小松院明德三年諱如上人建立なり諱如本寺を巧如に讓り當國礪波郡杉谷に幽谷なり時に異國より書翰京都へ來る文義曉りかたく仍て勅して諱如を召て讀ましむ文々句々水の流るゝが如し叡感最甚し時に越中に一宇を建んとを願ふ即勅許あり仍て越中へ歸りて地面を見尋給ふ井波に至りて諱如の乘たる馬留つて行かず蹄にて地をうかつ忽に清泉漏出たり爰において寺を建此清泉今猶あり臼浪水と名つく勅して瑞泉寺周圓上人と號を給ふ又礪浪を改

めで爲井浪　上宮太子繪傳あり巨勢大納言金岡畫衛銘御贊は　宇多天皇御震筆表具　加賀中納言利常公御寄付なり毎歳六月廿五日開披なり其外靈室あまたあり

井波家數五百軒余小杉御郡奉行の支配地なり

繩　池　一說に昔俵藤太秀郷繩池へ蛇を放てより池の主となりしとも云

井波より城端へ行道の向ふなる山の半にあり池の廻り廿六七丁水清くして池の底鮮明なり此水流れ出て山岸の田を養ふ傳云此池へ鉄物を投入れば晴天忽雲敗日甚雨なるよし又云此池の神賤女に變じて一年に兩三度城端の市へ出学がせを賣り若此かせを買得たる人は福有になるといひ傳へたり

三ヶ村　天滿宮

餘程の大社なり此社の前を少し行けは小川あり是を礪浪川と云其先の村を北野村と云

福岡芹谷野新村

此所に謙信塚と云あり婦負郡の内にもあり是非しれず此古墳に萱薄生茂れり人是を苅とれは必横死すと云馬も是を食へば必死すとなり謙信ならずとも故ある人の塚なるべし

嚴照寺　福岡にあり　西派方百間地面拜領

枅　上　新　村

此所に遵如上人ト居の跡あり

福　光　川

此川よもうくひと云魚出る名物なりうくひは所々あれども此川より出る通りの大魚はなし尤味ひ美なりと云礪波郡に川數多しその中に大河といふべき數左の通

庄川尾矢部川あらまた川やち川せんぼ川窪川礪波川山田川福光川その外小川あまたあり

子　撫　川

此川につきて怪しき物語あり昔東國より京師へ行僧有て此邊りの家に入て茶を乞ひて呑みけり此僧年若く甚だ美僧なり此家の娘愛染の心生して僧の歸りたる跡に茶碗に餘瀝少しありしを其娘呑みけり夫より懐姙して一子を生す父母其夫を問へども答ふる所なし此子三才の時件の僧來りて此家に立寄る娘しか〳〵のよしを語りて兒を僧に見せしに僧も思ふ所ありけるにや爭ふ事もなく念咒して此兒の頂より脚下まで撫でたりしに皆泡の如くとろけたりしを此川へ流しけるよし子撫川の名ありと云

櫛　田　明　神

此神躰は女のさし櫛なりと云昔此下の池より大蛇出て人を呑み或時一女此所を過る蛇出て呑まんとするに此女のさしたる櫛を見て恐れて近か付す却て池に遁入けるか其後此蛇出るとなし依てその櫛を止めて神に祭るよし里人の說なり又此所にくら田の清水と云あり昔辨慶か杖にて地を堀り清水を求めしよし云傳ふ

城ヶ端

古城跡なりと云昔荒木天膳と云人の居城なりと云見る所兩方に親部庄川の三川を堅固に受て後は高山手を立てたる如く殊に分内廣く双ひなき堅固の地なり此荒木氏は加賀の荒木善太夫の後胤なりけるよし城ヶ端家數千軒余町は南北へ長し東町西町出丸町上町下町大工町新町東新田西新田惣林寺町等なり城ヶ端の産物絹縮緬袖糸綿麻絹紙品々なり今石動奉行の支配地なり

善德寺門跡
蓮子東派

地面八丁四方加州より御寄付旦那三千余門の左右築地本堂東向十五間四面中の間四間半に六間脇の間三間半椽側一丈五寸本堂の内丸柱五尺廻り外は四尺廻り廻廊七間夫より書院對面所等數多し多分金張付彩色繪書院上段違棚等あり露地甚古く絶景なり正面には硫黄山と云雅山を受て其景言語に及び難し此硫黄山と云は頂上に硫黄あるよし此山の形東西南北何れより見ても少しも違なし誠に珍敷山なり本堂より右に玄關あり白州あり其先に櫻門組物見事なり本堂の前に鐘樓あり是又近來出來組物彫物見事なり城端より西に山道あり是より加州いわくの温泉まで四里なり甚難所なりいわくより金澤迄四里なり

天柱峰又云
立石

天柱峯は城ヶ端より東山中へ入る事四里是五ヶ山道なり右四里斗行て左の方へ十八町入れは其所なり此天柱の邊山川となり平面の地に見る面廿五六間斗にして眞直に數十丈柱の如くなり其近へ寄て見れば覆ひ掛かる如くにて目くるめきて見あけかたし頂上は大木一本あり其木枝葉何木とも見わけ難し是れ其高き事知るべし此所を松尾村と云五ヶの内なり三月末より九月初迄は天柱峰へは行難し此邊は蝮多く人を害するよし

卯花山

一說に射水郡にありと云名所方角抄には卯花山藪浪里碾浪山邊とあり城ヶ端の山つゞきにあり此卯花山に續て馬腦石の出る山あり金澤より御留なり番所もありしよし此山より出るめのふ石は扶桑第一の馬腦石なりと云

夫木　日影さす卯の花山の總衣誰ぬき　小侍從
かけて神祭るらん
新千載　時鳥卯花山にやすらひて空にしられぬ　守璧
月に鳴くなり
藪波里
藪なみの里に宿かり春雨に氷つらんと
涙に告つる

法蓮寺

法蓮寺は東福野の末和泉村の邊なり桑山と云山あり其山の麓なり邇如上八の像あり靈驗ありて遠

近の人是を尊信す毎歳三月廿五日開扉あり此桑山の上より松林あり此林の内に黑き石有方四尺斗上に一尺斗渡りなる穴あり深さ五六寸なり此中に冷水あり四季共にたへず里人是を汲尽すにしはらくの内に元の如く涌出る誠に奇妙の異石なり此邊にのうか村と云あり此所に延寶の頃かとよ次郎右衛門とて双ひなき大力大食の百性あり其比近國名高き者なり今も其子孫次郎右衛門とてあり村役人なり次郎右衛門に付剛力大食の物語あり

安居寺　彌勒山寺領二十石眞言宗

觀音釋尊作と云仁王運慶作繪馬狩野古法眼畫と云緣記に此寺は善無畏三藏此所に紫雲のたつを見て發起すとなり善無畏は北天竺甘露飯土の後胤なり唐の開元四年丙辰に長國に至り同三十三年に入滅し給ふ日本の元正天皇の養老年中に來りて弘法ありけれども時未だ至らず人化道せず無益の事になりぬ日本の養老元年は唐の開元五年に當るなり善無畏の日本へ來りしと違靡の片岡山の事に似たり此觀音再興は慶長年中岡島備中寄進にて大殿となりしなり安居寺觀音堂共に門先よりは右へ至るなり坂に鳥居あり柱四尺廻り中の開貳間半夫より見付に櫻門あり左右二王門の眞中に石の室塔門の内白洲あり正面觀音堂前六間椽共に八間あり高梁かへる殷すべて梅發御紋寶殿も梅發の御紋なり組物彫物見事なり今も加州より御修復あるよし前に云古法眼の繪馬と云は本堂の前に繪馬堂あり繪馬の高さ五尺に幅一丈余金張付に黑の鬣馬の繪なり此馬夜中村里へ出て田畑荒したる故鬣ぎたる形に筆を加へたりと云傳ふ見る所跡より筆を加へたるとも見得す又書付に元和八年七月十八日願主敬白とあり然れは古法眼の說心得難し又古法眼流の畫とも見得す寺僧に問ふに加州御廣式より奉納ありしよし觀音祭會毎歳七月十八日此後の山中に西國三十三ヶ所の觀音の石佛を安置す安居の山はしに杉木のみ多生したり白洲へ至る前に杉の大木あり目廻り一丈四五尺もあるへし其外境内末社多し略之

弘法の清水

安居より半里斗北へ行くに弘法寺村と云あり道の脇に清水涌出る一尺四方の箱を埋め置く此内に清水涌出づ其清く冷やかなる事類ひなし又水中一點の塵もなし傳て云此邊人家遠く水おしく旅人等水に渴す弘法大師是をあはれみて清水を出し給ふと云

弓の清水

此弓の清水と云は右弘法の清水の事か追て可尋也

あやこ村

此里は籠の煙外へ見へぬ所なりと云如何成故かしれず

しひれ川　橋あり

川幅八九間あり此川も親部川のわかれなり

蓮沼村

佐々成政加賀勢と攻合の節此蓮沼は越中勢の根小屋なりけるを加賀勢是を燒拂ふ依て越中勢敗軍

のよし見る所山の尾先にて越中の方へは次第に下り加賀の方よりは甚だ利あるべき地なり

黒　坂

今は此邊を荒町と云然れども安居よりくりからへ直に出る近道なり是を黒坂越と云又此道より西山の半に安居への道あり是を矢立越と云此黒坂の事は木曾義仲倶利伽羅攻の條に源平盛衰記にあり

今石動町名

能州石動山の五社權現の神躰此所へ飛び給ひしゆへに今石動と云由町家數五百軒斗あり産物布類を出す五郎丸布八撰布とて江戸京へも多く賣る也

熊野權現

治乱記に越中石動山の衆徒二千余人桃井播磨守と心を合せ斯波義將と合戰の事あり又能登の石動とも云今石動を五位の庄とも云北山の邊小撫川の上總江村田畠兵衛とて名高き百姓あり昔佐々成政の謀計を加州へ注進せしよし末森記に見得たり慶長十六年八月十一日總江村より五里四面並二尺四寸の兼光の刀黒革威しの鎧一領　利家公より田畠兵衛へ被下けるよし此石動山に後鳳僧都の石碑あり今に其靈を祭る鬼界か島の十二の滝と云もあり高岡の熊野權現も此所より鎮座のよし石碑に句あり

里の名もこんかきくけこ五位の庄　　作者不知

あいうへをぬて布をうつ秋　　宗祇

此邊に小屋部郷あり三日市十日市四日市など云ふ所あり此内四日市は余程の宿なり山つたひに道あり此所今も巡見の方通路なり氷見へ出るなり此山奥に鹽斗石とて人形の石にて腰をかゝめて鹽をはかる形の如し誠に奇石なり其外龍石も出づ色々奇石多し

八幡宮　羽丹生

木曾義仲の願書表指の矢今にある事は源平盛衰記にある願書之文左の通り大夫坊覺明筆なり

歸命頂禮八幡大菩薩日域朝廷之本主累世明君之裔祖爲守寶祚爲利蒼生改三身之金容開三所之權扉爰累年之間有平相國恣管領四海惣乱萬民猥蔑萬乘焚燒諸寺已是佛法之讎王法之敵也義仲苟生弓馬之家僅繼箕裘之塵見聞彼暴惡不能顧日慮任運於天道投身於國家試起義兵欲退凶器闘戰雖合兩家之陣士卒未得一塵之勇之處今於一陣上旗之戰場忽拜三所和光之社壇機感之純熟已明凶徒之誅戮無疑矣降歡喜之涙銘渦仰於肝就中曾祖父前陸奥守義家朝臣寄付身於宗廟氏族自號名八幡太郎以降爲其門葉者無不歸敬矣義仲爲其後胤傾頭年久今起此大切喩如嬰兒以蟻量巨海蟾蜍取斧向奔車然則爲君爲國起之爲身爲私不起志之至神鑒在暗憑哉悅哉伏願冥慮加威靈神合力勝決一時怨退四方然則丹祈相叶冥慮幽賢可加護者先令見一之瑞相仍祈誓如件

嘉永二年五月十一日　　源　義　仲　敬白

倶利伽羅

名所の礪波山といふは爰なるよし盛衰記二十七卷に云倶利伽羅山といふは加賀と越中の境なり峯に一宇の伽藍あり昔越の大德諸國修行し給ひしに倶利伽羅明王を行ひ給しかはそれよりして此山をくりから嶽とも申越中礪波郡の内なれは礪波山とも申なりとあり

妹か家に嶋のふるまひしるやらん礪波の關を　顯季

けふそ來れは

越路にはそり行ほとに成にけり礪波の關の

雪のあけぼの

歌には關を詠めり又名所方角抄云そりといふ物して北國の雪中にのりて引なりかちきといふものは別か歌などには見得ずと云

橇（カンシキ）雪車（トモ云）

右云越の大德とは泰澄法師なり神融和尚とも云元享釋書に傳あり義仲倶利伽羅合戰の事源平盛衰記平家物語等に出たり略之

巴山吹之塚

倶利伽羅峠南の方谷あひに二女の塚とて二つ見ゆ塚毎に松を植へたり巴女は木曾中三權頭か娘にて千騎の兵を預りし事盛衰記に見得たり義仲滅亡の後和田義盛にしたがひ義盛亡びては越中に至りて九十歳余にて卒したるよし然れば塚もあるべし山吹女の事追て可尋

松源氏二峰根俱

天正十三年八月廿四日佐々成政富山を打出松根源氏が峰倶利伽羅二俱など堅固にしてと末森記にあり

もとゝり山

傳云昔此あたりに住むもの男子を產す父母愛情甚しく然るに此兒年たけるまで足たゝず父母是を嘆けく或時米一俵をかつき歩行出たり父母見て驚くときに父母に向ふて云予は是何と云ふものにて已前其元へ米一俵かし置たり是をとらんため汝が子と生れ來れり今は元取したるまゝ歸るなりと飛が如く此山へ入りしが行方しれず夫より此山をもとゝり山と云よし此山高山ゆへ海上より目當とするよし

倶利伽羅不動明王に長樂寺寺領百十一石五斗八舛八合

一說云八劔大菩薩の作靈驗揭焉又云倶利伽羅一に云倶哩迦一に云迦夢迦龍一に云倶里劔一に云古力黑龍纏繞劔是不動威怒土三昧耶形也於壁上畫一劔以古力伽龍土繞此劔上龍形如蛇劔中書阿字心中亦自觀此劔及阿字了々分明心念不動使者誦根本陀夢尼一百八偏一日三昧滿六月多誦益好」不動堂は南向なり惣門の前右之方石壇十八九間あり上に愛宕大權現社等四社あり外圍の門二間左右仁

王あり不動堂本堂五間四方外椽六尺右椽共七間四面向拜付をろしや左方閻魔堂前五間梁間二間右の方六地藏又右に石の寶殿前二間之堂あり柿葺左に鎮守堂四尺四方本殿正面十一間梁間八間半玄關唐破風唐柱正面三間又惣門也

（編者曰ふ以上にて一卷より四卷畢以下五卷に移る）

文武天皇辛巳年二月四條大納言有若をしての越中國を領せしめ給ふと立山の縁記にあり此事國史等に載たるやしらず

追て可尋

聖武天皇天平年中中納言從三位大伴宿禰家持越中の守に任じ當國に下向の由萬葉集に見得たり家持は大納言贈從二位安麿の孫大納言從二位旅人の男なり

越中大守藤仲遠は天性慈悲和順にして仕官にありしと元享釋書に見ゆ

平家の侍越中前司盛俊當國を領せし由見得たり

利仁將軍に三子あり長子は越前にありて齊藤といふ二男は加賀國に在て富樫といふ三男は越中にありて非上といふと源平盛衰記三十四に見得たり

文治元年八月十四日大内の冠者惟義越中守に任ず

文治元年乙巳十二月六日記に云平家滅亡以後義經行家謀反の間ゑあるに付て鎌倉殿より折紙越中は光隆卿可給とあり

文治三年丁未三月二日の記に云越中國吉岡庄の地頭成佐不法等相累の間早可令改替之由經房の奉書到來仍則被獻御請文宿東鑑に見得たり

元弘の乱の時越中の守護名越遠江守時有舍弟修理亮有公甥の兵庫助貞時三人は出羽越後の宮方北陸道を經て責上ると聞ゑしかは道にて是を支へんとて越中の二つ塚と云所に陣を取りけると太平記に見得たり

北條時政の嗣子を江男小四郎義時と云義時の二男を名越式部亟朝時と云此男を尾張守時章此子を民部大輔公貞此子を名越遠江守時有と云

北山殿謀反の砌相摸太郎時兼北國に蜂起せしかは楠正成を討手に向はさるべかりしを准后のさゝへに依て桃井播磨守直常代り北國に下向し時兼を亡ぼせし恩賞として越中を賜はり在城せり

桃井播磨守直常斯波義時越中守護職に補せられし事太平記三十九に見得たり

足利斯波左衛門佐氏頼越中に在陣九ケ年を經て一國平均す其後畠山左衛門督基國管領恩補の國として嫡々相承して家料とす明應二年癸巳四月阿洲正覺寺表に於て彈正少弼義豐かために畠山尾張守政長殿死とあり

神保椎名以下越後の齊藤に便りて上杉顯定の幕下に屬す是より越中自ら山内の支配となれり

佐々内藏介成政は尾張春日井郡平の城主成しが信長公に仕へ度々忠勤あるゆへ段々大身となし給ふ越中神保安藝守越後に景勝有は心もとなしとて神保の介副として佐々を越中へさし越さるされ其後には神保を押こめ成政の支配にいたすべき旨信長公の内意を受て下着有依之後は神保は佐々

の幕下の樣ゑ成守山に在城せり佐々は富山入城しける其後成政は大き成志有て信長の二男信雄を取立天下の主となし秀吉を亡ぼさんとの企あるに付先づ三河の家康公の合力を賴まんとて十一月廿三日にひそかに富山を立て立山のさら〳〵越といふ難所をしのぎ雪中に赴きける

一書に天正十二年佐々成政十一月下旬深雪をいとはずさら〳〵越といふ所を過ぐとあり

末森合戰の後成政加州へ攻入らんと所々の取合あり秀吉公數萬騎を卒して發向あり安養坊山に御陣をすへらる時に成政諸勢富山一城につほみてありしか秀吉御出馬ゆへ是非なく降を乞はる成政を殺さんとも助けんとも利家の心まかせとありけれは利家公仰せには古傍輩の義に候得は御宥助可被下との義也利家公の大度寛仁の程感じ奉らぬ者なし依之新川郡一郡は佐々成政に被下殘り射水碕波婦負三郡は利家公御加增なり後に佐々へは肥後國を賜り其跡新川郡は秀吉公御藏入にてありしが後は金澤へ御拜領になり魚津に青山佐渡滑川に今枝内記富山に前田美作其外所司代諸奉行置かせられ越中全く治まり萬民安居となりにけり天正十三丙年秀吉公より碕波射水婦負の三郡を利家公に賜ふ新川一郡は佐々成政に被下同十四年成政へ肥後の國を被下新川郡はしはらく秀吉公の御藏入となり其後利長公御拜領なり右御藏入の節御代官前野五郎兵衛の由

天正十二年越中大水にて其上大地震見角川より川形東の方へ入川して野尙東黑瀨西塚原秋ヶ島島黑瀨東塚原と村々分り候事

同八年七月廿五日神通川常願寺川等諸川一時に大水にて島黑瀨龜淵馬瀨口其外所々川除切れ水込田畑を押流富山御城下過半水込

同九酉年天和と改元六月廿八日越後高田の城御請取の御樣子江戸より申來り同晦日より御領分人馬御改なり御用馬百五拾疋人夫千六百人馬一疋は三人に成口引共四人の圖り人馬共に合二万人の割符尙又增人六百人の被仰渡勿論男長け五尺五寸の御撰馬は四尺已上の事正甫公高田へ御發駕は七月十九日同廿二日越後中屋敷に御着同廿六日巳刻高田城三之丸御受取同八月十日高田御立同十二日御歸城

同年七月廿一日大風作毛白枯に相成過分の風損天和二年二月廿一日戌刻大光り物東の空より西の方へ飛ぶ

同年十二月廿八日江戸御屋形類燒す

貞享三年御領分凶作

元祿元年九月廿九日大風

同二年三月江戸御屋形造作出來

同九年九月二日芝增上寺御普請御手傳翌十年二月より御普請始同七月崔濟

同八年金銀吹替元の字極印あり

同十五年大坂より出羽之亟と云あやつり芝居罷越下桑原村にて舞台出來見物人多し

同年秋より御領分札銀通用被仰付京都より那早と申者札座に罷越候事

同十六年十一月廿九日江戸御屋形類燒

寶永三戌年四月十九日　正甫公於富山御逝去御年五十八御尊號正甫院殿前大府侍郎天心日管大居士

利興公御幼名萬德丸後主膳正甫公の御二男也延寶年五月廿七日富山御誕生貞享四年十歲にて御出府元祿七年從五位下に叙長門守と奉稱

寶永三年六月六日御家督同十二月從四位下に叙給ふ

同四年春江戸御屋形造作出來

同年十月朔日御入部

同年冬駿河國富士山大燒近國へ砂吹出し田地燒砂にて埋まる

寶永五子年十文錢通用寶永通寶裏に永久世用とあり

同年富士山より吹出候砂除金として日本國中へ高百石に付金子一兩宛上納の事

同年冬大雪翌年二月下旬迄時々雪降り二月中に屋根の雪をおろし候事

同六年五月十六日御預人太田十左衛門病死江戸より檢使新庄三左衛門殿來着事濟龜谷應擊寺境內に葬る

同年十一月六日御預人太田惣太夫御赦免同廿三日歸府其節松浦彌七町醫山本榮庵被指添候事

正德三巳年五月二日芝增上寺御普請御手傳被蒙仰同年十一月不殘出來

同四年午二月七日富山御本丸の御屋形炎燒

同年新金銀通用始まる

同六年金銀共に引替へる

享保元年御領分凶作

同年秋大風度々吹立毛風損多し

同四年冬大雪

同五年秋神通川井田川山田川洪水所入川相成西塚原等川除數ヶ所押切

同六年秋大風田畑風損多し

同九辰年七月十八日　利興公依御願御隱居　利隆公御幼名又三郎後彈正實は　利興公の御弟也

正甫公の五男也同年六月晦日御出府　利興公の御養子に御願七月十八日御家督御年三十五

同年九月六日從五位下に叙し出雲守と稱し奉る

同年十月廿五日御入部

同十年冬大雪當年迄三ヶ年續て大雪

同年十二月十八日　利隆公從四位下に叙し給ふ

同十六年御領分銀札通用

元文元年金銀吹替文の字の極印あり

同二年八月十日東叡山御本坊普請御手傳被仰蒙
同年十二月御手傳御用相濟
同三年五月十三日神通川等洪水御領分所々川除崩水込御城下過半水付
同年六月朔日亥刻神通川常願寺川洪水御領分所所水押し御城下へも水付
同年八月十九日神通川等洪水作毛水損多し
寛保二年八月朔日下筋大風雨武州常州上野下野信州洪水信州小諸田中の邊民家堂塔押流人馬共に夥敷死亡此節　利隆公御歸城の所下海道通路不相成依御願東海道通り八月十五日江戸御發駕同廿九日御歸城なり
延享元子年　利隆公十二月廿日於富山御逝去御年五十五太就院殿中太夫雲州刺史惠天日洽大居士と稱し奉る　利幸公御部名隆丸君後掃部享保十四酉年十二月十一日於富山御誕生寛保三年九月十一日御出府御年十五歳
同年十二月廿一日從五位下に叙し主計頭と奉稱延享二年二月廿二日御家督出雲守と御改
同年閏十二月十六日從四位下に叙し給ふ
同三年四月二日御婚禮　加賀宰相吉德公の弟女なり綱姫君と稱し奉る
寛延三午年四月越後の内能生名立有馬川邊山崩震動堂塔民家轉倒人馬多く死亡す其節富山大地震利幸公御歸城時節の處右の通越後大變に付て通路無之依御願同八月中仙道通り御歸城なり

寶暦二年夏船橋の鐵鎖打替被仰付輪鎖に成尤二筋の内一筋被打替
同四年八月八日辰刻神通川等氾水所々川除崩入川多し御城下水付
同八寅年八月二十二日神通川馳川氾水延寶八年以來の大水にて御領分所々川除切崩田地大損し御城下過半水込此節　利幸公御歸城御道中にて下筋も洪水にて信州丹波島に數日御滯留なり
寶暦十二午年　利幸公九月四日於富山御逝去御年三十四露慈院殿中太夫雲州刺史德風日顯大居士と奉號　利興公元文二巳年十月十九日於富山御誕生御幼名を藝之助又狀之助と改め給ふ十歳の時
前田内膳殿御家督御相續寶暦二申年被除御前髮髱負と御改
寶暦十二年九月　利幸公之急御養子同十月八日御出府同十一月御家督御年廿歳同十二月十八日從五位下に叙し出雲守と稱し奉る
同十三未年三月十日日光山御靈屋奥院共御普請御手傳
同十四年五月右御手傳御用相濟
明和元申年十二月　利興公御入部
同四亥年五匁銀通用始富山へは通用程不來
同五年四文錢始る
同七寅年七月十二日夜巳刻後堤町蓮照寺近邊町屋より出火折節南風烈町家燒失
明和七年寅七月十二日夜八つ時頃より出火翌十三日午刻迄燒竈數八百九十六軒内三百八十七軒

本屋二軒名代家十九軒潰家四百六十八軒貸家二軒かしや御家人十七軒かしや潰家一軒魚問屋及
役所古國府旅屋の表門同所太鼓堂御射手岡田五左衛門御手廻り佐伯三郎山伏立寶院長覺院蓮照
寺土藏二十二ヶ所納屋不知數人別四千三十八人内千九百四十二人難澁人町數二十町
安永元辰年南鐐二朱銀通用始る富山へは不來
同二巳年於江戸十一月十六日御用松平右近將監殿より御留守居御呼出被仰渡候は大原彦四郎御代
官所飛驒國村々百姓共高山陣屋へ相詰及强訴又々高山陣屋は通路を塞及不屆候右は此上何か可及
理不尽も難斗の間家來指遣御勘定組頭江坂孫三郎甲斐庄武助へ申談受指圖取鎮頭取候者等召捕候
樣に可被致候勿論時宜寄打拂候義も可有之候間鉄砲大筒不用意可被申付候有之候右に付江戸ゟ飛
脚十一月廿一日晝過到着翌廿二日巳の刻過一手合御人數組頭津田五右衛門足輕頭佐脇藤右衛門侍
廿五騎其外小荷駄奉行等出立被仰付然處飛州表事靜り候間御人數暫時見合候樣に彼地より飛脚途
中迄到着依て御領境猪谷に御人數屯いたし飛州へは二木勘左衛門恆川半吾罷出御用相辨候事其節
樣子爲御尋金澤表御使者遠藤兩左衛門大正持より堀江大七郎御遣候事
同五月富山中町數御改何丁目と表札に相記但半丁より過分は一の丁數に入半丁に不足の分は次の
丁數に入る
同四年甲州川々御普請御手傳被蒙仰
同年夏より御勝手御仕法の儀富山町中並八尺西岩瀬四方へ被仰付

同六酉年十一月八日　利興公依御願御隱居御年四十一淡路守と稱し奉る同七年十月廿九日御下屋
敷御移
利久公寶曆十一巳年於富山御誕生御幼名又三郎安永三午年三月廿六日御出府御年十四
同六年十一月八日御家督同十二月十八日從五位下に叙し出雲守と奉稱
同七年五月十二日御入部
同八年十二月十六日從四位下に叙し給ふ御治世萬々歲
天明二寅年七月十五日酉刻駿州富士山鳴動山崩人多死同日尾州の内三州の内川々洪水富山も右同
刻余程地震
同三卯年七月朔日より信州淺間大鳴動砂石降り同七日八日鳴動甚敷燒砂大石を吹かし淺間山吾妻
山近邊上州の内迄砂石夥敷降積民家燒失人馬死亡不知數其節武州邊も砂降上州利根川洪水近郷民
家流是又人馬死亡不知數其比富山にては七月六日晝より時々東方に當り震動す七日朝より震動無
間斷夜に入候て次第に震動强く八日朝六時に兩度余程の地震にて家々戸障子鳴候然處同日四ッ頃
より震動止候事
同年七月十日神通川鱒川洪水御領分馬瀨口を初め神通川縁數十ヶ所川除押切水込御城下を過半水
付去る寶曆八年八月八日巳來の大水なり今年諸國一統の凶作別て關東奥州飢饉なり金澤御領三ヶ
國にて正米廿五万石富山御領にて一万石斗不足と云々

同四甲辰年諸國飢饉別て奥州筋津輕抔は舊臘ゟ米穀甚拂底春に至り餓死人多邊土にては人死體並牛馬犬の肉を喰ひ飢を凌く北國筋も米高直其上日本一統温疫流行病死人甚だ多し同五月上旬公儀より時疫を治する藥方諸國へ御觸流し尤享保十八年巳年十二月御領へ御觸付の通りの藥方なり去秋信州淺間より吹出候砂除御手傳當春細川越中守殿へ被仰付御用代上納金都合二十万兩金と云

一天明六酉午年四月御勝手御改法被仰付左の通り御家中御知行等減免被仰付

一、百三拾石以上三ッ貳歩　一、百二拾石迄免三ッ四歩

一、八拾石已下免三ッ六歩　一、三拾八扶持已上五歩一引

一、貳拾五人扶持は四人扶持減　一、廿四人扶持已上十歩一引

但細工人組已上

一、下行被下候分十歩一引　一、金銀指添被下候者十歩一引祿に詰り分引直

一、組頭料知八百石已上無役知七百五十石宛免三ッ六歩

一、用人役料金五百石已上無役料二百石已下只今迄の通頭料金銀右同斷

一、諸役人金銀渡り銀拾枚已上半減五枚は二枚三枚は一枚減じ役料米五俵は二俵三俵は相減之事細工道具代隔年渡り是迄隔年渡は隔々年渡り

一、中坊主以下二十五俵被下候者ゟ十五俵迄二分一引

一、足輕已下は五人ふちは十七俵四人ふちは十四俵三人ふちは十俵半

一、中坊主は右同斷十二俵被下候事

役料米は五俵は二俵二俵は一俵に減ず一枚は金二百疋被下候事

一、袴羽織立付代或は細工道具代毎歳渡りは隔年渡り

一、寺領並御祈禱料並町人被下方祠堂利米に至迄或は止め或は減じ候

越中鍛治之次第

國宗　初大和國在後越中住

義弘　越中松倉住人鄉右馬元五郎入道正宗弟子名人

則重　越中佐伯住人五郎兵衛と云入道正宗の弟子名人

義貞　義廣　爲次

包義　近代上手

則房　大抵

清光　大抵

重清　大抵

右之外數ありと雖も銘鑑に不出又作物も無し

富山反魂丹

富山反魂丹は正甫公御代備州之淨閑と申者の秘法なるを日比野小兵衛を以傳法被仰渡其後諸人の爲賣出候義可然と被仰出に付右小兵衛ゟ松井屋源右衛門と申者へ傳へ夫ゟ賣出し段々諸國人へ賣藥して今日本六十余州へ賣廻る事なり右賣人組を定め六十余州に十八組と定め一組毎に掟を定め是を示談帳と云毎歳他國へ出人三千人余と云

神通八景

越の富山の神通川とて遠き境にも人の知りつゝ名高き流あり商人の通ひ舟帆掛てわたる有樣神通の歸帆とも云べき此川末に八田ヶ瀨とて砂清らかに釣する人の打つれて一木の松の嵐に晴行程八

田の晴嵐は爰ぞかし北に見えて西田とや田面の雁の聲に峰越え過るとも下るこそ西田の落雁とも云べき向ふに聞ゆる牛島の芦原に鷺の聲心細に雨夜更行風情是も一川の詠なり見渡せは絶まなく人のゆきかふ舟橋に夕月賑ひて黄昏を忘るゝ折節愛宕の鐘の夕へを告るにつけ遠近人も道急くらむと古き言の葉も思出侍る頭を左りに見上れは明神山とて草木もなめらかに打見へすくれてしん〳〵たる森みゑて七面の明神とかや社を搆ておわします神の心の其儘に秋の月いと澄てたふとくみゆる峰續きたり昔は人のゆきゝとやいつしか今は古坂の降續雪の夕暮に麓の道も見へぬよそほひひらの高根もかくやと知られてふるき人もい、おきぬ言の葉をつゝりて八の名所を爰にしとふも心の友ならんか

神通歸帆　眞帆ひきつひかれつ歸るいとなみに
　浮世を渡る川つちのふね

八田晴嵐　釣人もこゝにとゝめんそらはれて
　あらしを殘す川峰のまつ

西田落雁　峰越る聲も西田にうちなひき
　入日に落る雁のひとつら

牛島夜雨　芦の葉に降るも音なき夜の雨を
　たつこふ鷺の羽風にぞ知る

船橋夕照　人歸る袖に夕日をたつさゑて
　賑ひもぞふこしの船はし

愛宕晩鐘　ちかく鳴遠くひゝきてあたこやま
　霧にまされぬ夕くれのかね

唄神秋月　秋はなを祈るしるしもあきらけき
　神のこゝろや月にてるらん

古坂暮雪　月花になれすは雪の名にもたて
　世に古坂の夕くれのやま

右神通八景は　前田利鄕卿の御詠なり御幼名又千代君後内膳殿と稱す元祿十六年二月江戸にて御出生延享三寅歳二月御死去法名　清香院梅山日秀居士齋四十四御墓所大法寺　利隆公の御舍弟なり

有磯賦　幷序

有磯は昔大伴宿禰家持卿此國の守に任せられ此浦に遊び給ふとて四郡に磯の風景を探て詠歌の數少からず萬葉集に出る物しかなり雅人墨客も爰に歌をよみ詩をつくり代々の撰集に載する物おほし誠に三越の名蹤なり西に箱崎博多といひ東に松島佃瀉といひなして琵琶湖の八景といふともいかで此浦の産物にしかん爰にそれらの耳目をかたりて一篇に賦するものかくのごとし

世に傳ふ萬葉集に駒なみていさうち行んしふ谷の伊藤末にとも詠し或は有磯によする波いや思久〳〵にいにしへおもゆともよめる南は奈古の江にならひて射水川此間に流れいれは奈古と有磯との波をわかち北は能登の三崎につゞき眼前さらに際なし須柳山の嵐は蜑衣をひるがへし二上山の月は郭公をまつ英遠の浦眞柴川みすみ山の初雪は玉をけなりもみち川の夕日は錦をひたす垂姫の崎松田江の橋このくれ山もともに名を傳へて今は跡もさたかならずしかれば多枯の藤咲て布瀬の白浪と見ゆらんを和歌には一景二名なるや唐島のめくり二町ばかり其かたち方壺をちゝめて巓に辨天を安置す岸をめくれる奇石怪岩も龜蒼龍蛇の波に浮びてひとへに天宮を護するに似たり

昔源義經は安宅の關を凌き來てしばらく此浦の風景にやすらふ判官の茶の間辨慶が沓の跡牛島猿すへり此二島はかつきの蜃の息もつきあへぬ世のたつきに袖を干へき壽所とそ阿武島岩崎の島月手には狩野中務の城あり妻手には長澤筑前守の城あり海老坂山の出城は神保氏春の余波を傳へ手布か崎の石壁は菊地入道の世盛を思ふ金橋の觀音は船から月によろしく朝日の觀音は海より上るを崇む此ふたつの山は白鳳年中にひらけて共に異佛靈場なりさかり松御手洗水龍灯松の風しつまりて年越の夜の闇をちらし出雲窟の水清ふして三伏の夏の喉をひやす然るに明峰の光禪寺は洞家に四ヶ本寺なるよし本は七堂伽藍とか國泰寺は昔尊氏の建立にして由良に法燈の光を傳ふ何れも禪家の名區なり神社は射水郡布勢箭代磯部和泉の天滿宮は相生の竹を生じて直なる道を世にしめし金田の龍空藏は枯木にあらはれて祖德の名に花さかす諏訪野の松五社宮のさくら眞砂の千鳥は歌人の跡を傳へ入江のかもめは陰者の影をともるふ湊は出舟入舟の帆をかぞへ吳東楚南の人をましゆかしこに明州の津のしらす三越の風土の隨一と稱すべし氷見吳座氷見枇杓鰯鰡鼻曲とは魚の名ながらも名よしにはあらく聞ゆ蝸蜆海苔和布うつせ貝は歌仙に名高くつのじとは萬葉に詠めり扨も山里の土產には葛葉筑瑞田窪早借莚指崎繩女良庖丁は賤か手になれて終に悉王の厨を見ず長坂の桃味正の柿山のかせきも濱のわたらひも夕への鹽竈の煙沖に曉のいさり火の影見るに愁腸を寫さずといふ事なく聞くに旅魂を驚かさずといふものなし近きは元祿の始ならむ芭蕉先翁は秋にたどりわけ入右早稻の香を吟し師佛老人は春にあそびて島山の風情を詩に尽せりしかれば今も古へも此浦波のあとたへず濱の眞砂子の永き世に傳へしも遊覽の人の便もならんかも

右和漢文操にあり

富山船橋歌

英雄割據三大國重關千里限南北分藩君侯封富山嚴城壯廉淨如拭郭外神流神通河西連蒼海天一色遠源紡渺難窮目萬車青山雲相逐碧水冷々深幾尋不知淵底龍潛伏金繩一帶橫大河繫留百船似連屋船上陳板疑舒白虹波三千尺不須柱楹爲長橋不仮械樊通西陌東道驛亭分來往東馬日紛々橋直橋北遙回首兩岸爲掛掛自氣氣

右　越後州十二歳德龍

德龍は越後の產淨土眞宗の僧天明三卯年舟橋を一覽して即吟也その幼年の才を愛して爰に記す

富山地廻りに西國三十三所の觀音の影を安置す寺院左の通

一番　五番町　眞言宗　興國寺　二　同　淨土宗　極樂寺　三　南新町　淨土宗　大信寺
四　南新町　禪宗　清源寺　五　天台宗　圓隆寺　六　清水上町　淨土宗　西養寺
七　古鍛冶町　禪宗　興國寺　八　同　眞言宗　普泉寺　九　清水上町　淨土宗　正念寺
十　柳町　禪宗　淨禪寺　十一　稻荷町　淨土宗　蓮台寺　十二　同　天台宗　照岸寺
十三　南新町　眞言宗　宥照寺　十四　淨土寺　淨土宗　來迎寺　十五　淨土寺　淨土宗　來迎寺
十六　禪寺　蓮花寺　十七　寺　十八　南新町　淨土宗　無緣寺
十九　南新町　淨土宗　清光院　二十　大淨土宗　泉町　無常院　廿一　本郷村　觀音寺
廿二　布市村　興國寺　廿三　同　立滿寺　廿四　同　千日寺
廿五　寺町布市　來迎寺　廿六　上掛尾村　興眞寺　廿七　中野町　來迎寺
廿八　稻荷町　祐眞院　廿九　千石町　大平寺　三十　眞言宗　長柄町　全慶寺
卅一　眞言宗　長清寺町　高像寺　卅二　愛宕町　眞言宗　顯正院　卅三　愛宕町　眞言宗　不動院

一、富山にて飛紗綾立紋縮緬類織出しは安永の中頃上州より桑原源次郎といふ人來りて敎へしより高岡屋長九郎是を業として御用機屋となる

一、富山にて荒木弓打事は御先手足輕三輪源藏安永年中に打始其後東武に至り弓師三輪仁兵衛を師として益是を勤む

一、富山にて轡を打事慥成鍛治も無之所安永の末に定番足輕に横江長三郎初より鍛治細工をしたるに東武に至り一口何某を師として轡を打事を得て勤之

一、富山にて鉄砲細工の始は享保の末泉州境の人にて大島勘左衛門と云人御細工人組に御抱是より鑄筒を指圖し並金具を製す鉄砲の台師は足輕森安左衛門と云者右勘左衛門指圖を得て始て製之

一、富山にて具足鍛治は明和年中の末に手塚小十郎といふ者足輕にて江戸へ被遣明珍方へ弟子入被仰付傳來して製之後小十郎御細工人組に被仰付手塚を改明珍尉助と云

一、富山にて勘進角力の始は明和の末に東武より鬼頭崎岩左衛門と云者手下の角力七八人連來り鵜坂村鵜坂寺境内に始て興行あり其後京都江戸より角力取度々來りて所々にて興行す其前は牛ヶ首神明祭禮保竇坂の祭禮に里中の者のみ角力をとりし也元より勘進角力の取組合は無之右岩右衛門が始なり其後岩右衛門は富山住居御免にて津輕屋岩右衛門と云右生國奥州津輕のものにて以前の江戸關取源氏山何某か甥のよし

一、御領分藍を植へる初は新川郡出添村の百姓西國筋より種を持參して明和の初に田のあぜに植へしか夫より弘まり明和五六年頃より專ら植へる事になりぬ

一、天明六丙酉年八月廿九日末の刻頃大風雨近來無之事西風甚雨なり御領神通川井田川山田川洪

水野個村より南の方川除押切凡間數一万五千間余入川數十ヶ所野積谷の内山中民家轉倒大木倒山崩泥入人馬死亡あり水損風損都て損毛正米に一万三千石余と云

一、關東諸國水損夥敷委細は別記有之事

天正十三酉年十一月廿九日夜大地震彌波郡貴布禰の御城崩れ　利家公の御弟前田右近秀繼公御夫婦共に御壓死なり御法名瑞光院殿蜜庵水傳居士と号す御内室は眞光院殿即岩貞心大姉御菩提所永傳寺禪宗御知行四万石なり

文祿二巳年　利家公富山の城へ御移

同四年八月　利長公大坂より御歸國の後守山の城に御住居夫より金澤の城へ入らせらる

同十一年　利長公富山城へ御成其節富山御城代は前田美作のよし

同四年三ヶ國撿地御縄入

同十三年越中御撿地御縄入

同十年十月廿九日夜加賀國金澤御城天守へ雷落出火御城中一宇も不殘燒失依之　利長公富山の城へ御移に付御城代前田美作は加州小松へ歸る

同十四年酉二月十八日富山大火事御城中御城下共不殘燒失其比是を光嚴寺燒と云右に付　利長公しばらく魚津の城へ御移りなり

同年瀾野に城御築瀾野を高岡と御改め同八月十六日高岡へ御移り

同年御領分田畠十反の御改村高倭數をば何十石と石數に御直しの事

同十五年斗舛御改口米此時より一石に付八舛と定まる其節御郡奉行高田三郎兵衛と云

同十九年甲子五月二十日　利長公於高岡御逝去御齢五十三勅賜正二位權大納言号瑞龍院殿聖山英賢大居士葬高岡瑞龍寺

同年攝州大坂御陣の發り

元和元辰年五月大坂落城此時六月より千人夫に御領分より出百姓治郎左衛門か下人喜右衛門と云あり大坂にて鉄砲を股に受罷歸候後玉を堀らしける

同七年春諸國一流伊勢おとりといふ事流行して御領分も町々村々より先々へ送り渡す

同九年六月廿七日大出水神通川邊布瀬村のあたり不殘流失す

富山舟橋は慶安元年より始る樣子に被察候其前は往古より舟渡にて舟渡場も今の木町の先と見へたり船橋も初めは木町裏と見得たり　利長公の御下知狀に船橋小島町船頭共と有之候事

利次公御童名千勝丸御母堂は大政大臣秀忠公の御姫君加州筑前守光高公と御同服なり元和三丁巳年四月廿九日於金澤御誕生なり同七年東武へ御出五歳寛永六年四月廿三日叙從四位下侍從に任し給ふ松平氏を賜ひ淡路守と号し給ふ一書に寛永八未年十二月廿二日御元服同月廿七日從四位下侍從に叙任となり

寛永十三年より寛永通寶の錢始り

同十五年切支丹宗門御改
同十六年御分知十万石越中　内婦負郡七万石下新川郡の内一万石加賀能美郡の内二万石なり一書に婦負郡にて六万石加州能美郡にて二万石下新川浦山邊にて一万六千八百石余上新川の内御賜米として三千二百廿石此村は小泉大町根塚布瀬磯部羽根高田〆七ヶ村なり
百塚侍從と稱ふる事は百塚に新城御築の御願相濟其節は富山は御領分ならず新城御築迄富山の古城に御住居なし給ふべきよし　利長公御分知の節より御指圖ゆへ御居城なり
寛永十七辰年正月十二日於江戸御婚禮烏井左京亮忠政卿の御姫君なり
同年十月御入部一書に寛永十八年富山御入城尤八月より段々金澤より御家中引越婦負郡在々に住居となり
同十九年大凶年日本一統大飢饉
慶安二年船橋鉄鎖被爲打
同四年御領分撿地御繩入婦負郡御奉行蟹江主水石川與三左衛門なり
万治二亥年五月朔日大地震
同年富山御居城に相極る御領分替る加州能美郡二万石と下新川一万七千石余と替る其時富山諸役銀地子銀等まで御物成に積り込凡草高六千石と申事諺に富山六千軒と申候へ共其頃は三千軒には詰り申間敷由

万治三子年富山御城御修復初る
寛文元年富山町屋敷立替り
同二年六月十六日才後六谷崩大出水新保川除押切東岩瀬へ入川
同八年大洪水此時草島川除押切東岩瀬へ入川
同年舛の方堀り今の新京舛なり
同年五月五日大地震
同十年五月廿七日甲府宰相綱重卿の臣太田壹岐守の嫡子十左衛門同三男惣太夫右兩人公義より御預に付三の御丸の内馬場西屋形出來諸事町奉行御用掛り
同十一年大水にて龜淵川除切其外所々入川す
延寶二寅年春より飛州境山論地に付公義より撿使長田平右衛門佐脇傳右衛門來着富山より山小屋掛り此人足御郡中より平夫二万人余其秋凶作にて翌年の夏飢人多し
同年凶作の上風損にて御用捨米惣御郡にて七千五十石余有之事
同三年閏三月廿九日細野彌左衛門長屋より出火にて御城下過半燒失
同年七月七日　利次公お江戸御逝去御年五十八奉号龍光院殿前遣從四位下瑞嚴良禪太居士　正室公御幼名掃部　利次公の御二男なり慶安二巳年八月二日富山にて御誕生寛文二寅年四月八日御出府御年十四同三年卯十二月廿七日從五位下に叙掃部頭と奉稱同七年十二月廿七日御部屋住にて從

四位下叙大藏大輔と奉稱又近江守と御改
同九年正月復大藏大輔と御改
同年四月十八日御婚禮中川佐渡守御息女
同十二年五月十日御部屋住の内初て御暇同六月御歸城
延寶二寅年九月四日御家督同十一日御禮御年二十六同三卯年七月御入部
同年十二月呉服山にて雉を被爲得
同六年三月廿三日婦負郡吉作村邊にて狼狩に付て御家中並町御郡より人夫指出す
同七年右同斷奥田山近にて狼狩人夫右同斷
同年御領分凶作夏中大水出野倘布瀬井田邊川除切れ其外所々水込にて過分の水損
天明七丁未年八月七日利久公於東武御逝去御年齢二十七御諱茶德院殿同九月十六日東武御出棺同
十月九日富山へ御着棺於大法寺御葬式長岡へ同日夕御遷土
同年利謙公急御養子八月十七日御發駕同十月四日御稱号御親上松平と奉稱同九月廿九日御家督御
相續同十二月十八日御叙爵御名出雲寺と御更
同年二月夜半より富山に南風強吹翌十五日終日同斷御城中並御家中屋敷風損多し町の内家三ヶ所
吹潰す御郡地にて潰家三百八十軒立木倒一尺五寸廻り已上二千本余輕我人　三人有之金澤御領も
風損甚た多し

同九已酉年二月三日より寛政元年と改
同年四月濃州勢州川々御普請御手傳被蒙仰役人不相向御用代金納一萬六千三百余兩なり同六月に
御皆納
同年五月三日巡見上使筑紫從太郎殿大久保長十郎殿堀八郎右衛門殿富山御一宿
同年同月廿二日公領巡見御役人富山御一宿
同年六月廿八日御舍弟房次郎君御卒去江戸御屋敷にて御年十三歳
同年入梅五月十六日之處に其後四十日斗り天氣快晴打續作毛は越中一國繁茂して近年無之苗立の
由申ならしける所六月上旬より雨降つゝき同十五日神通川出水しかし洪水と申ほどにも無之同十
七日神通川井田川山田川共に出水夕方船橋に分る同十八日神通川出水夜半頃布瀬村の川除押切長
拵町邊水込強く御城より西の方家中屋敷町地共に水込三の御丸へ水込二の御丸堀村畢人門前水二
尺斗りたゝへ御堀縁二十間斗り崩れ入西の舛形御門傾き兩脇土居崩れ同所節の土居も崩れ御門下
地面も崩れ御門下地面も崩れ込助作御門も損し申す三の御丸御厩へも水付く西川筋川除口數十ヶ
所田畑石走砂入多有之並常願寺川も出水にて馬瀬口邊の川除大損し危きよし同廿四日神通川出水
鉄砲町平吹町へ通舟爲向候同日常願寺川出水鮏川砂町邊へ通舟爲向候閏六月朔日より同四日まで
甚雨打續神通川鮏川共出水町々へ通舟相向候同五日朝南風強雨甚しく夕八時鮏川俄に洪水右川筋
町々水勢強く鮏川上下の橋流失町家損家甚多し尤も流失家町々に有之候神通川出水は先月十八日

の出水より一尺斗りも些し常願寺川川除並西川所々夥多家損し田畑流失多く有之同七日昨夜以來甚だ雨にて朝五時より神通川鮏川共に洪水前代未聞の洪水鮏川筋町々水込高潮にて水勢矢を射る如く流失家藏夥敷委細別記に有之西筋も去六月十八日の水より一尺五寸も多く其上東西共に泥入甚だ多し夕方七時に減水す鮏川筋町々にて流失家泥入家合千九百二十軒余御城より西の方舟橋向共に百二十軒御領分にて川除切口一万六千七百間余御郡百姓家潰家流失共に二百六十軒余死人五人富山にて死人十人金澤表より御使者早打共に兩度御遣候御領作毛流失不作共に凡一万二三千石と云々

寛政六寅年八月廿九日於江戸御陰居　利與公御逝去御年齢五十御法號奉稱龍德院殿九月廿九日江戸御發棺十月十六日富山へ御着棺同日於光嚴寺御葬禮長岡御墓御遷土

同七卯年三月自仙院様富山へ御引越三の御丸御屋形御住居なり利謙公の御母堂様也

去寅の夏從江戸甘庶の根を持來て富山婦負郡五福村邊に初て植させられ候其冬中少玉砂糖黑砂糖なるに出來ず依て今卯の年御城内の明地又は村方にも多く植へる其後不宜相止り候事

享和元酉年三月利謙公御參勤六月初より少々御滯りの所次第に御指重り同八月廿六日御逝去にて兼て御願之通り大聖持飛驒守様頼母様御儀御養子にて御家督被仰出候同十二月十六日御叙爵被蒙仰御名淡路守様と奉稱候同年御實名利幹公奉稱翌年五年御入部也　（全篇完結）

明治卅七年十二月　日印刷
明治卅七年十二月　日發行

上製　金壹圓參拾錢
並製　金壹圓

校訂者　中越史談會
發行者　富山市西三番町廿七番地　福田榮太郎
印刷者　石川縣金澤市南町　廣文堂
發行所　富山市西三番町廿七番地　清明堂

複製不許

越中史料第二卷出版豫告

（約四百頁定價製本体裁ハ一卷ニ同シ）

富山藩日誌

稱して富山藩日誌といふ、初代藩主の時代より近く天保年代に至るまで、藩内に起りたる出來事は、藩主に關する事件は勿論、藩士の賞罰異動、天災地變、市井の雜事と雖も、年代月日を趁ふて細大記載す恰かも數百年間の新聞紙に同し、中越史談會が苦心の結果某所より探し得たる秘書なれば、史料として最も價値あるものと爲す、

富山藩主御系譜

題名の如く富山藩主初代よりの系譜にして、加ふるに代々の重なる出來事を載するが故に「富山藩日誌」と參考對照すれば、以て越中國内に於ける歴史に通ずるを得べし

越中方言集

方言の研究は今や漸く盛んならむとし、歴史に志ざす者の宜しく研究を爲すべき事に屬す、本書は窪美昌保君が、多年の苦心に依りて蒐集されたるものにして、分類正しく、方言といふ方言は殆んど網羅し盡す、今之れを乞ひ得て本卷に加へぬ、

1

大正十五年二月十日
小牧寥敏

291.42
E92
T

024431-001-7

291.42-E92T

越中史料

中越史談会／校

第1巻

M37-41

ADC-1622